

2003年度 卒業論文

主査 浦野正樹教授

都心における「場所の個性」とその可能性
～土地柄や気質からみる商業盛衰と大規模開発進行より～

第一文学部社会学専修4年

1c000795-2

塚本 淑子

総頁数 70頁 (総字数 82,530文字)

<目次>

序章	3
第1章 新橋の場所が持つ力	
1 - 1 新橋を取り巻く環境	5
1 - 2 新橋の場所が持つ力	14
第2章 歴史から見る新橋	
2 - 1 新橋を中心とした港区の歴史	16
2 - 2 歴史から見る新橋の変化と特色	24
第3章 人が住む町としての新橋	
3 - 1 江戸っ子の気質と新橋の町づくり	25
3 - 2 新橋の祭りと地域コミュニティの形成	27
3 - 3 新橋の町内会の変遷	30
3 - 4 新橋に暮らす人々とその商売	32
3 - 5 新橋の住民による新橋のまちづくり	35
第4章 芝家具が表現する新橋の個性	
4 - 1 現在の赤煉瓦通り	37
4 - 2 芝家具の変遷	37
4 - 3 芝家具業の人々の暮らし	50
4 - 4 芝家具の現状と都心における地場産業の特徴	54
第5章 都心における大規模開発	
5 - 1 住民主体ではない新しい町の誕生～汐留再開発～	57
5 - 2 新橋の町が分断される～幻のマッカーサー道路～	59
5 - 3 大規模開発が新橋にもたらすもの	64
第6章 都心における「場所の個性」とその可能性	
6 - 1 論文構成図	66
6 - 2 都心における「場所の個性」とその可能性	67

序章

現在都心と呼ばれている場所は、一般的に人の定住を感じられない町である。東京、新宿、渋谷などの町を歩いている、人の生活の匂いはしなく、その町を創っているのはそこに外から訪れる人々であると感じる。しかし実際のところはどうかだろうか。私は生まれてからずっと港区の新橋に住んできた。その中で、ささやかではあるがこの場所の一員として地元仲間とともに地域コミュニティを形成してきたつもりである。祭りやバザーを行ったり、餅つき大会、ラジオ体操などの地元の行事にも参加してきた。私はずっと都心に住んできて、都心にも生活する人々がいるということを常に感じてきた。しかしそれと共に、都心という場所は外から人が集ってくる場所であり、その人々が持つ力 都心という町を形成する力 も非常に大きいことも感じずにはいられない。このような現状から、都心という役割を担う町において、その「場所の個性」とはどのようなもので、それがどのような可能性を持っているのかという問題意識を持った。

東京都港区新橋 ここは一般的にサラリーマンの町として知られている。テレビのインタビューでサラリーマンを対象とする場合、必ずといっていいほど新橋の町が映しだされる。今回はこの町を卒業論文の対象地区とする。

私は1981年に生まれ、それから22年間新橋で暮らしてきた。私が通った東京タワーの近くにある地元の幼稚園は私立であったが、私が入園する時にはすでに子供の人数が減少傾向にあったため、入園試験も簡単なものでほぼ全員が入園できる状態であった。また、私が通った地元の小学校は、私の代の卒業とともに廃校、合併された。各学年それぞれ1クラスしかなく、私の学年は6年生の時22名であった。ちなみに、私が6年生の時の新入生は9名しか入らなかった。また、近隣の学校の中には新入生が3名という学校もあり、子供が少なくなっているということを強く感じた。私の学校も含め近隣の4校が合併を余儀なくされた。また、小学校卒業から今までの間で、この地を離れていった友達も少なくない。昔開かれていた地元の祭りも人の減少とともに衰退し、中には廃止されたものもある。またこのような人口減少と共に、この地域一帯のビル化が進行し、新橋はテナントが多く入る町に変わっていった。現在は特に汐留再開発に注目が集っており、この再開発によって大企業が次々とこの地に移転し、マンションやホテルも建てられることとなった。またこの再開発に伴って、環状2号線という大きな道路も新たに敷かれることとなり、現在計画進行中である。

このような状況を目の当たりにして、都心における町の中で、その「場所の個性」とは何なのか、それをいかに発揮できるのか、そしてその意義について考えてみたいと思った。「場所」はそこに関わった物や人の歴史の集積によって創られる。新橋の現状や歴史、新橋に暮らす人々の生活をみることで、この「場所」を表現する鍵を探っていきたいと思う。また、現在の新橋は情報産業中心地であり、目に見えない知的・創造的産業がその核を成

している。しかし新橋には昔、100年以上も続いた地場産業「芝家具」が存在した。新橋の特色を色濃く表していた芝家具の変遷を辿るとともに、現在その地位を情報産業に受け渡した理由を考え、新橋という場所の特色を明らかにしていきたいと思う。そして、都心の町にとって避けられない大規模開発を、新橋の住民がどのように受けとめ、活かしていこうと考えているのかを探り、大規模開発が新橋の場所の個性をどのように表現しているか考えたいと思う。

様々な都心の中から新橋という場所を選んだ理由としては、新橋は都心という地位を長く維持している場所であるため、港区や新橋の歴史を辿ることで、それぞれの時代で都心が担ってきた役割を明らかにすることが可能なのではないかと考えたからである。また、自分自身が新橋でずっと暮らしてきて、この町に大きな愛着心を持っているということも理由として挙げられる。

都心における新橋という場所の個性を多角的な面から分析することで、都心においてその場所の個性をいかに表現していくことができるのか、都心における町の在り方を考えていきたいと思う。

第1章 新橋の場所が持つ力

1 - 1 新橋を取り巻く環境

まず始めに、新橋を有する港区がどのような地域であるのかを、新橋という場所を意識しながら確認していきたいと思う。新橋の地場産業である芝家具は、周辺地域や海外との関係が欠かせない産業であった。このようにその場所が持つ力は、その土地にその場所特有の産業や人など様々なものを生み出す。よって、新橋がどのような場所に位置づけられているのかをきちんと認識することは重要であると考ええる。

位置

港区は、東京23区の中のほぼ東南部に位置している。反時計廻りにみみると、北端で中央区と接し、北で千代田区と新宿区、西で渋谷区と目黒区、南で品川区と接しており、東は東京湾に面している（図表1-1）。ちなみにこの中で、芝家具が栄えた芝地区（新橋含む）は、港区の中の一番海側の地域をいう。昔の港区は大きく分けて3つの地区に分けられており、海に面した地域を芝地区、真ん中を麻布地区、千代田区・新宿区・渋谷区に面した地域を赤坂区といった（図表1-2）。

次に図表1-3を見てほしい。これを見ると、新橋地区は港区の中で右上にあり、主に海と中央区に面した地域であるということが分かる。中央区には古くから栄える銀座があり、ここは煉瓦造りの建物などで有名である。新橋がこのように海に近く海外との連絡がとりやすい場所に位置していること、また洋風建築の多い繁華街である銀座とも隣接していたことが、新橋の地に洋風家具である芝家具を発生、発展させた大きな鍵となった。

人口

次に、港区の人口の変化を見ていきたいと思う。序章のところで、「地元の友達が次々と他の土地へ引越し、テナントが多くなった」と述べたが、それをデータできちんと示していきたいと思う。現在の新橋のまちづくりを考えていく上で見逃せないのが、新橋地域における地域コミュニティの低下である。人口の変化と土地の用途別内訳を見ることで港区の現状をしっかりと把握し、都心である新橋におけるまちづくりの問題点を人口という面から浮き彫りにしていきたいと思う。

港区の人口は2003（平成15）年3月1日現在、164,755人（うち外国人登録者16,494人）ほどである。この数字は、現在港区に自宅があり夜間は区内にいる人々（夜間人口）の数を表している。また、港区の昼間人口は毎年増加する一方で、その数は夜間人口の4倍を超えている（港区教育委員会，2003，pp.32～33）（図表1-4）。

また次に、港区の中でも地区別に昼夜間人口を見ていきたい。現在港区は大きく5つの

地区に分けられており、北から反時計廻りに赤坂・青山地区、麻布地区、高輪地区、芝浦・港南地区、そして芝地区となっている。図表 1 - 5 を見てみると、昼間人口と夜間人口の差が極端に大きいのは、芝地区、青山・赤坂地区、芝浦・港南地区であることが分かる。このことから、芝地区の中に位置する新橋の定住人口の低さが明らかになった。

港区の人口は、1960（昭和35）年に戦後最高の約25万6千人に達してからは、年々減少を続けてきた。これは、この間高度経済成長による都心の開発が進み、地価の高騰とともに多くの区民が港区から郊外へ転出したことが原因であると考えられている（港区，2003，pp.16）。新橋の地場産業であった芝家具だけでなく、新橋に店を構えていた多くの自営業者が現在衰退してしまったのは、このような土地の特徴とも関係しているといえる。

このように年々人口減少の一途を辿っていた港区であるが、港区の人口推移表（図表 1 - 6）を見てみると、1993（平成5）年頃から人口の減少が緩やかになりはじめていることが分かる。港区は1990（平成2）年に、「住みつづけられるまち・港区」を目標に第二次基本構想を策定し、様々な定住促進策をとってきており、その効果も人口減少に歯止めをかけた一つの要因として挙げられよう。また、臨海副都心の開発により1996（平成8）年には、台場地区に新しい町が生まれた。それと共にバブルの崩壊も起こり、1997（平成9）年からは一転して人口の都心回帰がみられるようになり、現在は人口が少しずつ増えてきている。今後も汐留や六本木などの再開発の計画を含め、中高層マンションの建設等により、人口はさらに増加していくと予想されている（港区，2003，pp.16）。

また、港区は埋立地の多い場所である。明治以降、東京港築港計画により海岸の埋め立てが進み、大正～昭和の戦前にかけては周囲を運河に囲まれた臨海工業地が造成された。日の出棧橋、竹芝棧橋など大型船の接岸できる棧橋が整備され、1941（昭和16）年に東京港として開港した。その後、周囲には倉庫街が形成され、戦後は港湾関連施設、工場、大学や都営住宅をはじめとして、高層マンションの建設が続き、定住人口も増加した（港区教育委員会，2003，pp.30）。このように、新橋には海を隔てた島に行く交通が完備されている。このような海との繋がりが、新橋の国際化にも影響を及ぼしたと考えられる。

新橋周辺地区に最近出来た高層マンションとしては、愛宕グリーンヒルズや汐留に建てられた何棟かの住宅棟が挙げられる。このように現在の新橋の住居形態は、昔の一戸建てからマンションへと変化していることが分かる。新橋の土地の値段はバブル期よりは安くなったといっても、現在もなお他の地域よりは高い。そのため一戸建てを買うことは現在も困難な状態である。マンションは一戸建てに比べて、周辺住民との関係を希薄にする。マンション建設によって人口回帰がみられたとしても、それがそのまま地域コミュニティの高まりに繋がるわけではないことに留意しておかなければいけない。

また、世帯数もこのような住宅開発の影響を受けて増加を続けている。家族類型別では単独世帯が4万世帯を超えて圧倒的に多く、構成比も50%近くを占める。また、高齢夫婦のみ世帯（夫婦の一方または両方が65歳以上）と高齢単独世帯は急増することが予想

されている（港区，2002年12月，pp.8）

港区では少子・高齢化の傾向が顕著であり、15歳未満の少年人口が港区全体の10%なのに対し、65歳以上の老年人口は18%を占めるにいたっている（港区教育委員会，2003，pp.95）。月1回配布される『みなと区報』にも、高齢者のための教室が多く掲載されている。しかし逆に私は、現在の港区は若者のための設備や教室が充実していないと感じる。高齢者対策も大切だが、それとともに若者のための行事や教室も充実させていかないと、住みづらさを感じる若者が次第にこの土地を離れてしまい、より一層の高齢化を進めてしまう危険性もあるのではないかと考える。

次に土地の利用法についてだが、2001（平成13）年民有宅地の用途別内訳（図表1-7）を見ると、東京都全体（23区）の住宅地区面積が271.331千㎡で構成比86.7%であるのに対して、港区の住宅地区面積は6.235千㎡で構成比68.5%と、全体の水準よりも低くなっている。また商業地区面積を見ると、23区は20.235千㎡で構成比6.5%であるのに対して、港区は2.505千㎡で構成比27.5%と、全体の水準よりもかなり高くなっていることが明らかになっている。この数字から、やはり港区は都心ということで、住宅地よりも商業地にウエイトを置いている地域であるということが分かる。前述したように、夜間人口が昼間人口の4分の1になるのも、このような土地の内訳にも関係しているといえるだろう。

交通

港区内には、多くの鉄道や重要な道路が敷かれている。都心として果たすべき役割、求められるものは多々あると思うが、その中の一つとしてインフラ整備が挙げられると考える。芝家具の発祥、発展においても、1872（明治5）年に創設された新橋駅が重要な役割を果たした。新橋は、他地域との交流が密接である場だということができる。そのため、人の出入りも激しくなっているのではないだろうか。

まず港区内を走る鉄道を見ていきたい。港区内を走るJR線には、京浜東北線、山手線、東海道線、横須賀線、総武線、東海道新幹線がある。また、2003（平成15）年より品川駅に新幹線用のホームが開通した。都営線には、三田線、浅草線、大江戸線がある。また営団線（帝都高速度交通営団）には、銀座線、半蔵門線、丸の内線、千代田線、日比谷線、南北線がある。その他の鉄道関係の交通機関としては、東京モノレール（浜松町～羽田間の13km）、ゆりかもめ（東京臨海新交通臨海線）、りんかい線（東京臨海高速鉄道・新木場～大崎間の12.2km）が挙げられる（港区教育委員会，2003，pp.23）。

港区内に走る鉄道の中でこのうち新橋駅に停車するものは、京浜東北線、山手線、東海道線、横須賀線、総武線、浅草線、銀座線、ゆりかもめの8本である。また、新橋駅のすぐ近くにある汐留駅には大江戸線が停車し、新橋駅から徒歩圏内の御成門駅には三田線、同じく徒歩圏内の銀座駅には丸ノ内線、日比谷線、浜松町駅にはモノレールが停車する。このことから、鉄道の多い港区内でも際立って中心的な位置を占める場所として新橋が

位置づけられているのだということが分かる。私は長年新橋に住んできたが、その中で元の友達とも意見が一致するのは、「新橋に住んでいれば車はいらない」ということである。鉄道という便利な交通機関が発達している地であることが、新橋のまちづくりに大きな影響を与えたといえる。

次に道路だが、港区内には古くから重要な2本の道路が通っている。一つは第1京浜国道（国道15号線）である。これは、江戸時代に最も重要な街道であった東海道のことをいう。この第一京浜が新橋の西南から北東にかけて走っている。この道路は、新橋の中でも外堀通り、日比谷通りと並んで広い通りとして知られており、多くの人々の交通を支えている。港区内にあるもう一つの重要な道路は、赤坂見附から青山を通り、渋谷に抜ける青山通り（国道246号線）である。古くは厚木街道（大山道）とよばれた江戸と相模を結ぶ重要な街道で、この街道の両側には、徳川家康の重臣であった青山家の広大な屋敷が広がっていた（港区教育委員会，2003，pp.24）。このような大きな道路を持つことは、都心の役割の一つであるといえることができる。このような道路は、住民が好むと好まざるに関わらず敷かれるものである。都心であるということ、大きな道路を敷くなどの大規模開発も受け入れていかなければいけないということである。

大使館と外資系企業

港区は外国人や大使館、外資系企業の多い場所である。その具体的な数や歴史を辿ることで、港区と海外との関係を明らかにしていきたい。特に新橋は、鉄道主用地であったことから、早くから海外との連絡の場として重要な位置を占めていた。そのような新橋の土地の特徴が、芝家具を育て、新橋を都心に押し上げた一つの要因でもある。

港区は23区全体で4番目に外国人の多い区である。最近では欧米を中心に家族を連れた企業人の増加が目立ってきている。外国人の国籍は様々で、110ヶ国余りにのぼり、2003（平成15）年3月の外国人登録者数は、16,462人になっている。そのうちの約半数はアメリカ人をはじめとする欧米系の人々が占めており、これは他区には見られない特徴である（港区，2003，pp.16）。

また、港区には現在67ヶ国の大使館がある。2002（平成14）年の国際連合加盟国は192ヶ国であるから、その数は世界の国々のおよそ3分の1である。またこの数は、日本に大使館を置いている国の約55%にあたる（港区教育委員会，2003，pp.34）。このことから、港区は大使館の多い町でもあるといえる。

このように港区に多くの大使館が集中した歴史は、ペリーの来航により鎖国が破られた幕末の頃までさかのぼる。1858年、幕府は米・英・仏・露・蘭の5カ国との間に修好通商条約を結ぶと、各国の公使を江戸に居住させることを認めた。各国は、当時開港地であった横浜と江戸城を結ぶ地点にあたり、東京湾に面し船からの連絡に便利な港区内の寺院を間借りして公使館を設けた。明治維新（1868年）後は、日本の近代化とともに国交を結ぶ国も増え、首都として政府機関が集る東京の都心部に多くの大使館が集った。中

でも港区は、江戸時代に武家屋敷になっていた広い土地があり、その跡地に建てられたものが多くあった。戦後は、国際社会における日本の地位の向上により、新しい独立国や発展途上国からも相次いで大使館が開設された。ただ最近では、地価の上昇や各国の国内情勢から、規模を縮小したり、ビルの一室を借りて大使館を開設する国もある（港区教育委員会，2003，pp.34）

江戸時代の中心地であった江戸城とは現在の皇居のことで、港区の北側に接している千代田区に位置する。前述した大使館に関する記述を読むと、大使館の建てられた場所の特徴が新橋周辺地区の特徴と一致することに気が付く。新橋周辺地区は、海に近い地域であり、広大な武家屋敷跡地があった。このようなことから、新橋は港区の中でも重要な海外との連絡場所だったことが分かる。新橋周辺地区は都心として、道路だけでなく、大使館も受け入れた。このように、新橋周辺地区は当時から都心としての役割を時代の流れによって次々と受け入れていく場所であった。逆にいうと、このような地域特性が都心を生み出し、そして都心にふさわしい地場産業を、新橋の地にもたらしたといえるのではないかと考える。

また東京は、日本の経済発展とともに国際経済の中心地となり、外国の企業や個人によって設立された外資系企業も進出してきている。日本に進出する外資系企業は、活動の根拠地として国際化の先進地である港区に注目している。港区は日本経済の中心地である都心に位置し、日本の大企業の本社や情報産業が集り、外国大使館の半数以上が集中するという条件から、外資系企業の活動にも最も適した地域である（港区教育委員会，2003，pp.42～43）。図表1-8を見ても、その数は明らかである。またこの図表でもう一つ明らかなのは、外資系企業数の多い上位6区が全て港区に隣接した区であるということである。このことから、港区が外資系企業地の核を成しているということが分かる。

このような傾向に伴い、区内には外国人向けのショッピングセンターやインターナショナルスクールも多く造られている（港区教育委員会，2003，pp.14）。外国人の多くは、大使館や外資系企業に勤める人とその家族で、日本に数年間居住して帰国する人がいる一方で、戦前から定住している人もいる。このように多くの外国人が住む港区には、外国人に対する様々な配慮が見られる。町の地番を示す表示板には、漢字とローマ字が併記されている。また、外国人向けに英語版の広報誌『Minato Monthly』を配布したり、区政要覧や区内の地図も2ヶ国語表記にしたり英語版を発行したりしている。港区では、国際交流専門の職員をおいたり、災害や選挙などの情報を知らせる広報放送も日本語と英語で実施している。また、1992（平成4）年にはボランティア団体の港区国際交流協会が設立された。これらの活動をもとに、最近では外国人と日本人の交流の場も増えてきた。区立の小・中学校には多くの外国人の児童・生徒が通い、地域の祭りなどに参加する外国人の姿も見られるようになった。また、区内の小・中学生は、北京市朝陽区と書道などの作品を交換し、友好を深めている（港区教育委員会，2003，pp.98）

このように地域に様々な国籍の人が集ることによって、それに関心を寄せる人、それを

商売とする人などが集ってくることとなり、より一層様々な人間をこの地域に集めることに繋がる。このように港区という地域は、多種多様な人種や職業が集ることによって、さらにその求心力・集約力を高めている地域であるということがいえる。

地区別にみる港区

次に、港区を地区別に分けて、それぞれの地区の特徴を明らかにしたいと思う。前述したように、港区は赤坂・青山地区、麻布地区、高輪地区、芝浦・港南地区、芝地区の5つの地区に分けることができる。この中で新橋は芝地区に位置している。

この5つの地域の中で、芝地区や青山・赤坂地区は大企業の本社や有名な商店が集っている地域である。ビルの建て替えや模様替えが盛んに行われており、町の変化のスピードが最も早い地域であるといえる。昼間は他地域の人々を受け入れて町は活気に満ちているが、夜間は人が減少し静かな町へと変化する。また、東京湾に面する芝浦・港南地区は、工場や港湾施設の建設のために造成された埋立地なので住宅地はもともと少なく、昼でも人通りの少ない地域であった。しかし、近年は再開発が進められたり、高層住宅が次々と建てられており、町の雰囲気も変わりつつある。また、麻布地区と高輪地区では、昼間人口と夜間人口にあまり大きな差がないのが特徴である（図表1 - 5）。ここには、港区内の夜間人口の5割以上にあたる人々が住んでおり、戦前からの古い家並みが残っている住宅地や大規模なマンションなどが混在している。寺社や外国公館なども多いため、他地区に比べると昼の流入人口は少なく、緑の多い落ち着いた表情の見られる町である（港区教育委員会，2003，pp.32～33）。

このように同じ港区でも、細かい地区に分けてみると特徴が異なることが分かる。芝地区は昼夜間人口の差や町の変化のスピードの速さから、区内でも最も都心の役割を担っている地域であることが明らかである。

港区の産業

今まで、港区や新橋が置かれている環境を細かく見てきた。では次にこのような環境に置かれた港区や新橋がどのような産業を生み出し、発展させていくことができるのかを見ていきたいと思う。芝家具衰退の後顔を出したこれらの新産業にはどのような特徴があるのか。それを明らかにすることによって、都心における産業の特色と意義を考えていきたいと思う。

現在首都東京の国内総生産は、国内第2位の大阪府の2倍以上と圧倒的な規模を誇っている。中でも港区は、企業の本社機能や外国企業を含め、多くの企業・事業所が集積する都心部を構成している。また港区では、多種多様なサービス業の事業所が都内で最も多く活動しており、中でも映画・ビデオ製作や、放送業、情報サービス業、広告業など、情報関連（ソフト系）産業が最も集積している地域である。また、デザイン業や法律・特許・コンサルタント業など専門的な知識・能力等を提供する専門サービス業の集積も高くなっ

ている。区内では、開放的な産業風土も手伝い、先端的な情報の発信・加工・交流が頻繁に行われている。情報を軸にビジネスが展開される、いわば知的・創造的能力の高い都市型産業として発展している（港区，2002年12月，pp.143）。

～港区のシンボル「東京タワー」が示す港区産業の特色～

港区は日本における新聞、放送の発祥地であり、現在も首都東京における情報の発祥地としての役割を果たしている。現代の私たちの生活は、テレビ、ラジオ、新聞、雑誌など、電波や活字の伝える情報なしには成り立たないことから、情報中心地である港区の重要性、都心としての役割を認識することができる。

明治初期の1874（明治7）年、虎ノ門で日本初の新聞が創刊された。この新聞は、江戸時代の情報伝達の手段であった『読売瓦版』の名をとって『読売新聞』と名付けられ、やがて全国紙に発展していった。現在区内には、業界紙などを中心に英字紙も含めて約20社の新聞社があり、様々な角度から情報を提供している（港区教育委員会，2003，pp.36～37）（図表1-9）。

また日本で最初の無線放送が行われたのは、大正末期の1925（大正14）年で、現在のJR田町駅（新橋駅から山手線で2つ目の駅）に近い芝浦の仮局舎からであった。その後、愛宕山（現在は放送博物館）に東京放送局（後のNHK）が設置されてラジオの本放送が始まり、情報は瞬時にして全国に伝達されるようになった。戦後の1953（昭和28）年にテレビ放送が開始されると、電波による情報伝達の重要性はますます増大し、民間の放送局も次々と開局した。1958（昭和33）年には、芝公園（新橋駅より徒歩15分）に当時世界最高の日本電波塔「東京タワー」が建設された。現在も東京タワーは、都内各地のテレビ、ラジオなどの放送局と首都圏の家庭や全国の放送局を結ぶ発信・中継の拠点であり、同時に情報の発信地・東京のシンボルとして多くの観光客を集めている。このような都市生活の変化に伴い、西麻布にはFM波を使った音楽専門局が開局した。また、BS専門の放送局も開局するなど、港区内において放送の多様化が進んでいる。そしてまた、港区には放送局が多々あることから、その求心力によってこれらの周辺には、番組やCMの作成にかかわる企業やタレントを派遣する企業など、他地域にはみられない業種が集っている（港区教育委員会，2003，pp.36～37）。

前述したように、外国人が多いことに伴ってそれに関わる様々な人がこの地域に集ってくるように、情報という目にははっきり見えない産業を港区産業の強みとすることによってもまた、それに関連する多くの企業が集ってくる。このように港区、特に芝地域は、情報の溢れる街であることから、人々に多くの可能性や視野の広さを提供する町であり、それがまた港区を支える活力となっているのだと考える。ただ、このように情報が溢れる町だからこそ、人々に大きな可能性を与えるが故に、地場産業が発展しにくいという面も忘れてはいけない。

～ 24時間動く町と衰退する商店街～

これまでは、港区の企業面、通学や通勤で人が集る町であるという説明をしてきたが、港区はそれだけではなく、買い物や観光を目的として訪れる人々の多い魅力的な町でもある。赤坂、青山、六本木など、最新のファッションを提供するお洒落なブティックが並ぶ通りや、世界の国々の味が楽しめる本格的な飲食店が集まる繁華街は、新たな現代文化を生み出し、国際性豊かな港区の独特の雰囲気を作り出している（港区教育委員会，2003，pp.38）。先日六本木を朝6時半頃通った時、その人の賑わいにとっても驚かされた。日本人だけでなく外国人も混ざり、24時間休むことなく活動しつづける港区の町の側面を見たような気がした。

その一方で、港区の住人にとって日常生活になくてはならない大切なものが、身近な商店街である。区内には約60の商店会があるが、その大半は生活に密着した商品を扱う商店街を形成している。しかし現在は、国際化の進展と価値観の多様化、少子・高齢化と家族形態の変化、ライフスタイルの変化などによる消費者ニーズの多様化、インターネットの急速な普及に見られる高度情報化、環境共生・環境意識の高まり、再開発による新たな町の誕生や大規模店舗の立地などが進んでおり、商店街は厳しい経営環境に置かれている。夜間人口の減少とともに売り上げが伸び悩み、地価の上昇の影響や商業集積地間同志の競争などもあって、店の経営を続けることが困難になった地域もあった。地域の人々とのふれあいを大切にこれらの商店街では、売り上げの増加を図るために特売日を設けたり、サービス券を発行するなど客足の確保に努めている。また、近年急速に増加したコンビニエンスストアは、幅広い商品を扱い、売れた商品をすぐに補充するPOSシステムを取り入れた効率的な経営で、24時間活動する都会生活にすっかり定着した。古くからの商店も、コンビニエンスストアに模様替えする店が多くなった（港区教育委員会，2003，pp.38）（港区，2002年12月，pp.155）。

新橋周辺にもいくつかの商店街があるが、私が22年間この町に住んできて見てきた商店街を改めて振り返ってみると、やはり最近では新橋周辺商店街の衰退を感じざるをえない。商店街といっても昔の名残があるだけで、もうほとんどの店が廃業し、テナントが入っているという商店街も見られる。新橋周辺は、六本木のようなディスコ街でもないため夜は人口がぐっと減るので、必ずしも24時間営業することは住民から求められていないだろう。しかし品物の値段の高さは問題であると感じる。新橋は土地の値段が高いためどうしても商品の値段を高くせざるをえず、それが人々の商店街離れの一つの要因となっているのではないかと考える。また、第4章で述べる地場産業であった芝家具も3代以上続いた店がほとんどなかったように、情報の集る港区は人々の可能性を広げ、人々が代々に渡って同じ生き方をすることをさせないのではないかと感じる。また、住民の移動が激しい新橋において、地域コミュニティの形成は困難であり、それが商店街衰退にも関係しているのではないかと考える。

～都心に求められる工業～

港区は、日本最大の工業地帯である京浜工業地帯の一角に位置し、様々な業種の工場が立地している。東京港の整備と埋立地の拡大にともない、食品加工やセメント製造などの大工場が立地し、臨海工業地域が形成されている。

前述した情報の中心地としての東京の発展とともに、戦後の港区を代表する工業に成長したのが印刷工業である。港区の中でも、とりわけ芝地域に多く立地している（図表 1 - 10）。

港区には、政府機関や大使館をはじめ、大企業の本社などが数多く集っている。これらの機関で取り交わされる様々な情報は、文書を通じて内外に伝えられるため、大量の印刷物が必要となる。印刷物の作成には、漢字や文章の誤りを正すための作業（校正）など注文を出す企業と印刷工場の間で密接なやりとりが必要である。このような条件から、印刷工業は政府機関や大企業などの集る都心部に立地した。そのため、印刷工業は典型的な都心型の工業といわれている。外国でも、ニューヨークやロンドンなどの大都市には、共通の特色がみられる。政府機関や大企業の事務書類の他にも、パンフレット、カタログ、ポスターや電気製品の取り扱い説明書など、港区で生産される印刷物の種類も多様化してきた（港区教育委員会，2003，pp.40～41）。

区内の印刷工場の大半は、密集した住宅地域や商業地域内に建てられた町工場である。従業員の数は、数人から10数人の規模のものが多く、仕事には熟練した技術が必要とされた。しかし、密集地の町工場では、地価の変動や振動、騒音などの公害に対する規制も厳しいことから、工場の規模を拡大することが困難になった。このため、一部の印刷会社の中には、事務所だけ区内に残して郊外に工場を移転させた会社もあった。現在都心部の再開発が進む中で、都心に残る町工場は厳しい時代を迎えている。最近では、コンピューターを使った製版が行われるようになり、印刷機も自動化され仕事の能率化が進んできている（港区教育委員会，2003，pp.41）。

このような印刷業の特徴は芝家具ととても似ている。実際に新橋で製本屋をしている方にヒアリング調査をさせていただいたので、このことについては第3章で詳しく述べたいと思う。

～都心の町を変える大規模開発～

地価の高騰により、都心に住んでいた住民が郊外へ転居し、古い住宅が取り壊され企業のオフィスが次々に建設され、港区内ではドーナツ化現象が起きてきた（港区教育委員会，2003，pp.87）。このように年々区内の人口が減少してきたこと、その人口減少を緩やかにし、近年人口回帰の方向に向かわせている要因が再開発によるビル建設であることについては、すでに述べた。

新橋周辺では、ITを中心とした高度情報化や国際化の流れの中で、汐留・品川・六本木の再開発地域の超高層ビル群が2003（平成15）年前後に相次いで完成している。

汐留地区にも電通や日本テレビなど多くの大企業本社ビルが集ってきて、ビジネスセンターを形成している。またそれとともに、これらの地域はレジャー施設としても発展を続けている。私は汐留内にあるカフェでバイトをしているのだが、今年の夏は日本テレビがオープンしたこともあり、観光客でとても賑わった。現在では修学旅行生も立ち寄る港区内の新たな名所となりつつある。また、今年の冬には4本ものクリスマスツリーが汐留内に飾られる予定で、企業人が集るためだけの場所ではなく、様々な方向性を持った町として今後も変化していくことが予想される。

さらに、2003（平成15）年に東海道新幹線の駅が開業した品川駅の港南口周辺も再開発が行われている。東京港連絡橋（レインボーブリッジ）が1993（平成5）年に完成し都心に直結された台場地区でも、住宅や商業施設などの建設が進められた。また、東京臨海新交通（ゆりかもめ）や臨海線など台場地区と東京の各方面とをつなぐ交通機関の整備も、新駅の開業や路線の工事が完成した（港区教育委員会，2003，pp.15）。

このように都心、特に港区では多くの再開発が行われており、町をどんどん変化させていく。このような急速なスピードでの町の変化は、人々の創造力をかきたてるが、それとともに古いものとの共存の難しさを住民に感じさせる。都心といってもそこは人が住む町であるため、古い町並みの保存も重要視されている。再開発と以前からある町との共存は、都心に住む人々の大きなテーマであるといえるだろう。これについては、第5章で詳しく述べる。

1 - 2 新橋の場所が持つ力

『場所の力～パブリック・ヒストリーとしての都市景観～』の中で、著者であるドロレス・ハイデンは場所の力についてこう語った。「場所の力。それはごく普通の都市のランドスケープに秘められた力である。共有された土地の中に共有された時間を封じ込み、市民の社会的な記憶を育む力である」（ドロレス・ハイデン，2002，pp.4）。

1節で新橋を中心とした港区の環境を見てきたが、ここからは様々なことが浮かび上がってくる。

芝地区が海に面しており、芝地区の中でも新橋地域が特に海に面する場所であること、また新橋が、埋立ての際に造られた竹芝棧橋とも近い位置にあること、これらの条件が海を隔てた遠くの国と新橋とを結ぶこととなった。また、新橋は古くから鉄道主要地として栄えており、現在も交通の便が良いことが、このような海に面するという立地とあいまって、大使館や外資系企業の増加をもたらした。またこれに関しては、芝地区に武家屋敷跡地が多く残っていたことも一つの要因として挙げられる。このような環境が、洋家具である芝家具をこの地に発祥、発展させた大きな要因となっているだろう。また芝家具に関しては、新橋地域が煉瓦造りの建物の立ち並ぶ銀座に面していたことも関係していると思わ

れる。またこれらは、新橋を都心という地位に押し上げた要因でもあると考えられる。

また、交通の便が良いということは人々の可能性を広げる。港区や新橋周辺地区には、劇場や美術館、博物館などの文化施設も多く集り、また古くからの神社や名所も多く存在していることから、現在は新しい生活の場として注目されている。例えば、通勤時間が長くかかればその分自分の自由時間が減ってしまうが、港区に住んでいれば、仕事が終わってから劇を観てその後お茶を飲み、そこから歩いて家に帰るというようなことも可能になり、自分の時間の使い方に幅を持たせることができる。このことから、都心は働く場所としてだけではなく、住む場所としても大きな可能性を秘めていることが分かる。しかし現実問題として捉えると、物価が高く自然も少ないため住みにくい、仕事とプライベートの間に仕切りが欲しいなどと考える人も根強くいることは事実である。

事実、現在の芝地区の夜間人口は、昼間人口の4分の1程度である。このことから新橋の定住人口の低さがうかがえる。また近年高層マンションの建築が増加し、人口回帰はみられているが、住宅形態が「マンション」であるため、どうしても軒を並べる一軒家と同じような地域コミュニティを形成していくことは困難な状況である。また、現在この地域には、一人暮らしや高齢夫婦世帯が多いため、両者が関わりを持つ場というのは極端に少ない。また、自営業者にとっても家族がいる店が少なければ、やはりそれだけその店が永続する可能性は低くなり、町のコミュニケーションの場であり、中心地として栄えるはずの商店街にも陰りが見えてきてしまうであろう。また、商店がコンビニへと模様替えする傾向が見られることから、この町が24時間人の動く町となったこと、そしてそれは生活感の薄れてきた証拠でもあるといえるだろう。

新橋の地場産業であった芝家具が衰退し、情報産業が台頭してきたという流れは、日本の時代の流れと一致する。ドロレス・ハイデン著『場所の力~パブリック・ヒストリーとしての都市景観~』の中で、訳者の後藤春彦氏は都市の景観を次のように語っている。「空間に手を入れ、使い込んでいくことにより、さまざまな意味が派生し、そこに記憶が蓄積されていき、場所と呼ぶべきものとなる。場所とは社会的な記憶の源泉であり、記憶の糸が紡がれた織物のような存在であり、そしてその力は再び人間の五感へ働きかけてくるものである。都市の景観はどんな言語表現よりもはるかに饒舌に場所の社会的な記憶を語る力を有している(ドロレス・ハイデン, 2002, pp.4)」。よって、新橋地域に赤煉瓦造りの建物ができたこと、そして洋家具が隆盛を遂げたことは、新橋地域が日本の最先端で洋風化を成し遂げていたことを意味する。また、現在東京タワーやNHKがこの地域のシンボリック存在としてあるということは、この地域が情報の最先端であるということを表しているといえる。これらは日本の時代の流れと同じであり、このことから新橋を含む港区地域が時代の最先端に行く場所であるということが明らかである。鎖国により閉ざされていた日本社会が、その後海外との連絡をとるようになったことで、日本は洋風化した。そして、現在世界は情報の時代である。情報のシンボルがこの地に在ることによって、この場所が日本を支えている場所であるということが分かる。

第2章 歴史からみる新橋

2 - 1 新橋を中心とした港区の歴史

まちはその場所に過去存在した人々、起こった出来事などによって形成されていく。よって、現在の新橋のまちづくりを考えるうえで、この場所の歴史を理解することは大変重要である。また今回の卒論では、「都心としての新橋」という視点からのまちづくりも考えるため、それぞれの時代において新橋が担ってきた都心の役割を明らかにすることは不可欠である。またこのように歴史を辿ることで、新橋という場所が持つ力を鮮明にすることができると思う。また、次章で述べる芝家具がこの場所に発祥し発展した理由を明らかにする前提材料としても用いたいと考えている。

江戸のまちづくり～火事と喧嘩は江戸の華～

港区の歴史は古く江戸時代までさかのぼる。

港区は、徳川家康が江戸幕府を開いてから発展した地域である(港区教育委員会, 2003, pp.44)。城下町「江戸」のまちづくりは、徳川家康が江戸に入国した1590(天正18)年～1660(万治3)年の70年間に3段階に分けて行われ、将軍の代にして家康、秀忠、家光、家綱の4代におよぶ大建設となった。江戸は、日比谷入江や海岸部の埋め立てを進め、港・運河・舟入堀などを造り、臨海部の低地に計画的に造られた世界でもめずらしい人工的な都市である。しかし、臨海部と埋立地という特殊な条件のために、井戸水が塩気を含んで飲料水として適さなかったため、江戸は上・下水道の完備を最優先としてまちづくりが行われた。そして18世紀の始め頃には、人口が約100万人に達したといわれる世界的な大都会として発展していった(港区教育委員会, 2003, pp.58)。

1700年頃におよそ100万人いた江戸の人口のうち、約半分の50万人は町人であった。この数字から、江戸は町人の人口密度がとても高かったということが分かる。また、江戸の町の広がりとともに住み分けも進んでいった。山の手の地域は武家の居住地、下町の地域は町屋というおおまかな区別があったようである。そして、江戸の商業の中心地は、日本橋から京橋にかけての道幅約18mという都大路で、通りに面して江戸の本店が軒を連ねる繁華街であったそう(港区教育委員会, 2003, pp.59)。

図表2-1は、新橋周辺地域の様子を表したものである。江戸時代の新橋地域は江戸城(現皇居 千代田区)に近い地域であったため、武家地がほとんどであった。この地域の武家地の特色の一つは、大名屋敷、特にその上屋敷が多く連なっている点である。これら大名屋敷は明治になって多く荒廃した。また、町屋がみられるところは、今の新橋駅に近いあたりから西へ虎ノ門に至る地域と、新橋から南へ東海道に沿った地域とであった。この地域の町屋はいずれもその創設は古いものであり、江戸時代の初期にはすでに存在して

いた。新橋地域で寺社地に属するところは、ごく一部であった（港区教育委員会・港区文化財調査委員会，1972，pp.17）。また、新橋駅から大門にかけては日蔭町という通りがあり、古着などで有名な商店街であった。

新橋・汐留地域は、芝口1～3丁目、源助町、露月町、柴井町などの町屋と多くの武家屋敷が密集している江戸城下枢要部の門戸にあたる。徳川氏が進めた市街発達政策の中でも、この辺りは最も早く市街地となった。それ以前は、人家はもとより道もないような場所であったとされている。また、現在の汐留駅周辺は、江戸時代初期には葦沼であった。北部から次第に人家ができれば、その後武家屋敷が広大な敷地を占めた。徳川家康は入国後、日比谷にあった民家を芝口（銀座）地域に移したり、鎌倉海岸の芝居小屋を芝井町へ移すなど、町屋の発展にも計画的に力を注いだ（港区教育委員会・港区文化財調査委員，1972，pp.57）。

また、地域別に見てみると、芝（新橋含む）・赤坂・麻布の周辺は、旗本屋敷や大名の下屋敷（国元から送られてくる産物を収める蔵や大きな庭を持つ別荘で、火災時の避難所としても使われた）があった。また愛宕周辺は、特に大名小路と呼ばれていた。区内にある大名の上屋敷（参勤交代で大名が江戸に来ているときに居住した屋敷）は、江戸にあった総数263のうち76がこの地域にあった。また、芝西久保・三田周辺では、明暦の大火（1657年）以降、寺社の移転が続き、寺町として栄えていた（港区教育委員会，2003，pp.59）。

また、「火事と喧嘩は江戸の華」といわれるように、江戸では火事が多く、大火とされるものだけでも80回を数えている。なかでも1657（明暦3）年1月18日に起こった火事は、「明暦の大火（振袖火事）」とよばれ、江戸市中の大半と江戸城の天守閣・本丸・二の丸、三の丸まで二昼夜にわたる火災で焼き尽くした。この時の焼死者は10万余と伝えられている。このように大火による犠牲がとて大きいものだったので、幕府と江戸の人々はその後防火対策と消防システムの整備に力を注いだ。明暦の大火以後、幕府は都市改造に着手し、大名屋敷などの武家屋敷が造られるとともに、数多くの寺院が移転してくるなど急速に町並みが発展し、それにとってもともと農地であったところも市街化して、町屋も増え、住民も増えていった。（港区教育委員会，2003，pp.44・60）

しかしその後、1855（安政2）年10月2日午後10時頃、百万都市の江戸を「安政の大地震」が襲った。地震の規模はマグニチュード7.5であったが、比較的風が穏やかだったため火災による被害は少なかったともいわれている。死者1万人以上、倒壊家屋1万4000戸以上、消失家屋多数を出した大地震であった（港区教育委員会，2003，pp.67）。

このように江戸の町は、火災や地震などによって何度も壊れては直すの繰り返しで続いてきた町であることが分かる。

江戸から東京へ～鉄道創設によって変化する新橋～

その後1868（明治元）年7月、新政府は江戸を東京と改め、9月には明治と改元し

た。天皇は公家や諸藩の兵を従えて京都を出発し、10月には江戸城に入った。それまで江戸は、参勤交代で全国から武士が集まり、消費都市として発達し、江戸時代の最盛期には人口130万人と推定される世界最大級の都市であった。しかし、明治維新の結果、徳川家が多く旗本とともに静岡に移り、大名たちもそれぞれの領国に引きあげたために、人口は半分以下の約50万人に減ってしまった。特に大名の下屋敷などの武家地が多かった麻布・赤坂地区では、大名屋敷は荒れ果ててしまい空き地が増えたため、政府は大名屋敷を買い取り、皇族や政府高官の屋敷にしたり、役所や軍用地にした（港区教育委員会，2003，pp.72）。芝にも大名の下屋敷などの武家地が多く、これらが跡地として残っていたことがその後の芝家具の発生に大きく関係する。

明治維新によって新政府の幕開けとなった時、新橋地域を華々しく飾ったのは、「汽笛一声」に表された1872（明治5）年の鉄道創設であった。この「新橋ステーション」は、現在東新橋1丁目に広大な敷地を有する汐留駅のことである。文明開化の先駆けとも言えるべきこの鉄道開通によって、新橋は時代の脚光を浴び、その後も交通の中心地として発展を続けた。また、戦前戦後を通じて商業地として発展し続けた（港区教育委員会・港区文化財調査委員会，1972，pp.58）。

明治維新の後、東京の行政組織はめまぐるしく変化したが、1878（明治11）年「郡区町村編成法」により、東京府は15の区と6の郡で構成されることになった。これによって、現在の港区の地域には、芝区（現在の新橋周辺含む）、麻布区、赤坂区がつくられた（港区教育委員会，2003，pp.73）。

ここで、新橋周辺に焦点を当ててみると、明治以降の新橋付近の変化については、前述したように武家地がすっかり荒廃したこと、1872（明治5）年に汐留駅が開かれ鉄道が開通したこと、やがて1909（明治42）年12月烏森駅（1924年12月に新橋駅）が営業開始したこと、また、1903（明治36）年日比谷通りが開設されたことなどが大きな変化として挙げられる。また、丸の内のビジネス街や銀座の発展などもこの地域の変化に大きく関係している。現在の新橋周辺の発達の方角を考えても、西の方角については、霞が関の官庁街と新橋駅との間の繋がりがあり、北の方角については一つは丸の内のビジネス街と新橋駅、一つは銀座と新橋駅という繋がりが分かる。このことは、明治初年の鉄道開設以来続いてきたと考えられている（港区教育委員会・港区文化財調査委員会，1972，pp.31）。

新橋、難波橋、土橋を渡ると銀座の表通り裏通りに接する所にあったのが、新橋1丁目である。明治時代になると、このような位置にある土地が銀座の延長として発展し、やがて大正昭和時代に入るとカフェや料理屋も多くなっていった。また、新橋2丁目は芝において最も繁華なところになった。もと武家地であった烏森町の地域などは、武家地の消滅とともに一般の人々に移り住み、烏森神社付近には新橋以北の芸妓なども移ってきて、烏森花街を成すことになった。これら花街の発展なども、鉄道の起点の近くという条件が大きな力となっているものと考えられている。また、このような新橋付近の明治当時から

花柳界、料理屋、カフェ、飲み屋、また、文明開化を誇った牛肉料理屋などの発展の名残りが消すことのできない地域的特色となって、その後も長く続いてきているものと思われる。また、明治初年からの特色と考えられる他の面の一つとして、汐留駅に近い地域の運送店の存在も挙げられる。しかし一方、新橋（橋名）が早くから開かれていて、この付近は古くからの商店街であったため、てんぷらの橋善、つくだ煮の玉木屋などが繁昌もした。その他日蔭町通りでは、明治時代以降も古着屋・洋服商が軒を連ねた（港区教育委員会・港区文化財調査委員会，1972，pp.31）。このように発展した新橋地域と比べて、少し奥まった場所は、関東大震災までは武家屋敷地帯らしい物静かな町であった。しかし、その後は次第に都心的になって商店・小工場・住宅の町となっていく。

芝田村町（西新橋）1丁目あたりは、明治の末まではあまり賑やかではなかったが、桜田付近は昔からの小商店の地域であり、その他は住宅が入り交じる静かな町であった。よって日比谷通りが開通し、ビジネスセンターとの関係が深くなるにつれて、大会社やそれらの事務所・商店が集り、芝で最も近代的な地域となった。やがてこの傾向は北の外濠を埋めて大きなビルが立ち並ぶまでになっている。今の芝虎ノ門から西新橋1丁目1番・2番、新橋1丁目の1番・2番に連なるダイヤモンドビル・東京桜田ビル・日本酒造会館ビル・三井物産ビル・日比谷ビル・東電旧館ビル・第一ホテルなどがこれである。また、新橋3丁目から5丁目のもとの大名小路にあたる通りは「赤煉瓦通り」と呼ばれるようになり、現在もその名は引き継がれている。この赤煉瓦通りには、銀座にあるような赤煉瓦造りの西洋風建築があった。西洋風建築ができたことも新橋駅付近の近代的変化の表れであったと考えられている（港区教育委員会・港区文化財調査委員会，1972，pp.31・32）。

新橋における鉄道の役割

ここで少し歴史からはずれるが、新橋を語る上で欠かせない鉄道敷設について詳しく見てみたいと思う。新橋が鉄道主要地であったことが、新橋のまちづくりや新橋という場所が持つ力に与えた影響は多大である。開設当時の鉄道の様子を見ることで、新橋の町に鉄道がどのような役割を果たしてきたのかを考えたいと思う。

何度も述べてきたように、新橋に鉄道が開設されたのは1872（明治5）年のことである。場所は現在の新橋駅ではなく、現在の汐留駅にあった。鉄道は新橋 - 横浜（現在の桜木町）間に開通し、文明開化の象徴として注目を浴びた。新橋 - 横浜間を約53分、運賃は上等で1円12銭5厘だった。鉄道開設にあたっては、品川、高輪付近の用地が手に入らなかったため海岸を埋め立て石垣を築いて線路を敷いたり、風の強い日にはホームの客に波しぶきがかかったり、といったような大小の問題があったようである（港区教育委員会，2003，pp.73）。その後、1889（明治22）年に東海道線が神戸まで全通し、1914（大正3）年に現在の新橋駅が誕生した。それまであった新橋駅は、貨物専用の駅（汐留駅）となった（港区立みなと図書館，1993，pp.1）。しかし、1986（昭和61）年に汐留貨物駅は廃止され、その後再開発が進む中で1992（平成4）年から発掘調査が開

始された。汐留地区には伊達、保科、脇坂の大名屋敷があったため、多くの遺物が発掘され、また当時の新橋駅の様子も明らかになった。ちなみに、当時の駅の様子は平野威馬雄氏の『銀座の詩情』の中で次のように語られている（港区立みなと図書館，1981，pp.21）。

駅前には一方が大江橋をもっていて、一方は新橋を擁していた。いずれも、横っちょにプラットフォームがあり、今のどの停車場よりもエクゾチックであった。デパート寄贈の大きな油絵の美人画の額がたくさん壁面をかざり、ひし形の大きな平たいランプがともり、駅夫がカランカランと手鈴をふって、汽車の発着をしらせてくれた。

この言葉を読むと、当時の日本において新橋駅がどれほど先進的であったかがよく伝わってくる。特にランプや鈴など西洋のものが使用されている点は、新橋の芝家具（洋家具）発祥にも大きく関連しているように思えておもしろい。

新橋駅における鉄道創設に対しては当時、賛否両論があった。反対意見は、大きく四つに絞ることができる。一つ目は外国人が東京へ入ることによって起こる様々な問題、二つ目は商業貿易の中心が横浜から東京へ移ることによって生ずる問題、三つ目は住民の生活権に対する圧迫、四つ目は軍事上の問題である。このような反対もあった中で最終的には新橋に鉄道が創設されることとなったのだが、「なぜ汐留か」ということに対しては明らかな答えはない。外国技術者の進言や東京の市街地計画、港湾との結びつき等々、様々な角度からの検討がなされた結果であろうと考察されている（港区教育委員会・港区文化財調査委員会，1972，pp.58）。

町の発展にとって鉄道の敷設はとても大きな役割を果たす。昔鉄道の敷設を拒否したために現在は廃れてしまった町もある。鉄道を敷設することの利点として、町に人が集ってくる、ということが挙げられる。日本初の鉄道が敷かれた新橋は、こういった意味で狭義の範囲内でのまちづくりにとらわれず、広い視野でのまちづくりを展開していくことができたのではないかと考える。鉄道敷設によって、様々な情報や色々な人がこの町に集ってきたことによって、新橋という町に多様性を与えていったのではないかと考える。

大正から昭和にかけて～各地区の特色と関東大震災によるまちの変化～

では、再び歴史に戻ってみたいと思う。大正時代の港区地域は、山の手の邸町という感じの麻布区・赤坂区に対して、下町的な商店街や町工場がひしめく芝区という特徴があった。また、芝区の中でも白金から高輪にかけては住宅地や寺町という町並みがあった。1914（大正3）年に発行された『東京概観』には、港区の特色として、「皇室用地が多い」（浜松町の芝離宮など）、「大使館が多い」、「軍用地が多い」ということが特色として挙げられている。軍用地については、皇居に近いこともあって、天皇を守る軍隊である近衛歩兵旅団や連隊のほか、陸軍歩兵旅団の司令部や練兵場もあり、広大な敷地を持っていたそう（港区教育委員会，2003，pp.78）。このような大正時代の港区の特色は、現在の港区

に引き継がれている。武家地の跡地があったことが、大使館をこの地に多くもたらし、現在の港区を国際交流都市として押し上げる根底となったと考える。また、大使館が多いこととともに皇室用地も多かったことが、芝に洋家具をもたらし、また芝家具を高級品に押し上げたのではないかと考える。

また3区内の交通は、商業地域や工業地帯の広がり人口増加によって、鉄道を中心に発達した。区民の身近な足として発達したのが路面電車の市電である。1903（明治36）年に東京電車鉄道会社によって、東京15区の中でも最も早く開通したのが新橋～品川間であった。そして明治の末までには、区内の幹線道路のほとんどに敷設された。また東海道の起点だった新橋駅は東京駅にその地位を譲り、汐留駅として貨物専用駅になった。新しい新橋駅（烏森駅）がつくられ、山手線には電車が走り、大正時代末には山手線は1周34.5kmの環状線になった。地下鉄は1927（昭和2）年に上野～浅草間が開通し、1934（昭和9）年には新橋まで延長され、1939（昭和14）年に浅草～渋谷間の銀座線が全線開通した（港区教育委員会，2003，pp.79）。現在新橋は鉄道の主要都市として欠かせない場所となっているが、その歴史を辿ると、新橋は早くから鉄道の主要都市として位置付けられていたことが分かる。

しかし、1923（大正12）年9月1日、またしても大きな地震が港区を襲った。マグニチュード7.9の関東大震災である。被害は南関東一帯から静岡・山梨にかけての1府8県に及んだ。東京では死者・行方不明者が10万人を超え、焼失地域は全市の約45%にあたる34.7km²におよぶ大被害となった。港区地域では特に芝区の被害が大きかった。火災によって、芝区の4分の1が焼かれた。芝区役所や慈恵医大病院をはじめ多くの官庁・工場・銀行・寺社が被害に遭い、芝区の小学校の半数にあたる9校が焼失した（港区教育委員会，2003，pp.79）。

その後政府は、首都の再建に取り組んだ。区内の道路の幅を広げ、アスファルト舗装した。麻布区から芝区の海岸に向かうための障害となっていた愛宕山にトンネルが造られ、新しい交通路となった。また、それまで木造づくりだった小学校は鉄筋コンクリートになった（港区教育委員会，2003，pp.80）。また、震災復興事業の一つとして東京港の開港も挙げられる。芝浦の港は水深が浅く、救援物資を積んだアメリカの船が接岸するのに苦労した。この経験から東京港築港の動きが起こり、1934（昭和9）年に日の出棧橋・竹芝棧橋が完成した（港区教育委員会，2003，pp.80）。

またこの関東大震災では、新聞の発行が不能となり、混乱と被害を拡大した。そのためラジオ放送の必要性が高まり、1925（大正13）年3月22日、アメリカのラジオ放送から遅れること4年、芝浦のスタジオから日本のラジオ放送第一声が流れた。6月には東京放送局は愛宕山に本放送施設が完成したので移転して、本放送を開始した。1932（昭和7）年には、ラジオ聴取加入者は100万人を超えた。放送局は1938（昭和13）年に内幸町に移転したが、愛宕山にはNHK放送博物館があり現在もその放送の歴史を知ることができる（港区教育委員会，2003，pp.80）。

このように、震災がまたしても港区や新橋の町の発展に大きく寄与したことが分かる。また、一番先にラジオ放送を手がけたのが港区芝浦であり、これはこの地が情報中心地であったことを示している。

太平洋戦争～空襲によるまちの壊滅と再生～

1941（昭和16）年12月8日、日本はハワイの真珠湾を奇襲攻撃するとともに米英に宣戦布告を行い、太平洋戦争が始まった。太平洋戦争の中で港区が一番被害を受けたのは、爆撃によるものであった。1944（昭和19）年以降、アメリカ軍のB29爆撃機による焼夷弾による空襲が続いた。特に1945（昭和20）年3月9日から10日にかけての空襲は、現在の江東・墨田区などの下町を焼き払った。この東京大空襲で26万戸以上の家屋が焼け、約10万人の死者を出した（港区教育委員会，2003，pp.81）。

この時の空襲で、港区地域では特に芝区の被害が多かった。赤坂区では檜町と青山あたり、麻布区では飯倉から三河台にかけて焼失した。その後5月23日には麻布の飯倉から日ヶ窪・鳥居坂一带、24日には芝区の新橋・田村町、麻布区の本町・竜土町・筈町、赤坂区の青山南町・桧町などを焼失、25日から26日にかけては赤坂区・麻布区のさらに焼け残った所、芝区では田村町・芝公園一带・浜松町・白金・海岸通りから芝浦・三田・新橋一带から明舟町が焼かれた。次いで5月29日にはわずかに残っていた芝区の高浜町・高輪南町や品川駅などが焼かれた。特に港区の大部分を焦土した5月24日・25日の空襲は、「山の手の大空襲」ともよばれている（港区教育委員会，2003，pp.81）。

この空襲による被害を、新橋周辺に焦点を絞って更に詳しく見ていきたいと思う。汐留貨物駅は京橋からの火で丸焼けになり、新橋駅も無残に焼けた。太平洋戦争末期の空襲による新橋周辺地域の詳しい被災地区を以下に示す（港区教育委員会・港区文化財調査委員会，1972，pp.13～14）。

- 1944（昭和19）年11月30日 浜松町2丁目、宮本町（芝大門）1丁目、芝公園7号地、栄町
- 1945（昭和20）年3月9日 汐留町（東新橋）、新橋3・4丁目、芝公園3・4・5・20号地、田村町（西新橋）3・4・6丁目、愛宕町（愛宕）1・2丁目
- 同年4月4日 浜松町2丁目、中門前（芝大門）
- 同年4月15・16日 愛宕1・3丁目、田村町2～5丁目、新橋2丁目
- 同年5月24日 南佐久間町（西新橋）2丁目、汐留、新橋3・5丁目、田村町2・5・6丁目
- 同年5月25日 愛宕町、芝公園2～5号地、田村町1・2丁目、片門前（芝大門）1～3丁目、宮本町、新橋1～7丁目、浜松町1～4丁目

このように新橋周辺地域は、そのほとんどが空襲によって焼け尽くされたことが分かる。空襲が激しくなると、火災の延焼を防ぐために道路や交通機関・重要な建物のまわりは防火帯として取り壊されていった（港区教育委員会，2003，pp.82）。

1945（昭和20）年、太平洋戦争は終わりを迎えた。1935（昭和10）年に3万7千人住んでいた港区地域の人口は、この敗戦の年には疎開や焼け出されたことにより、わずか9万人に減少していた。点々と立つ鉄筋コンクリートの建物の内部は焼けて空洞化していたという（港区教育委員会，2003，pp.84）。

戦争中は食料やその他の生活物資は厳しい統制や配給制度が守られていたが、終戦を境にこれらに大混乱が起こった。新橋駅西口前に建てられたバラックのマーケットは、東京最大の市場（闇市）といわれ、この闇市では、正式な配給ルートにのらないヤミ米や握り飯、雑炊、すいとん、さつま芋、チョコレート、バター、メリケン粉などの食べ物や、鍋釜などの家財道具、衣類などが法外な値段で堂々と売られていた（港区教育委員会，2003，pp.84）（港区立みなと図書館，1993，pp.11）。ここでもやはり、新橋が鉄道主要都市であったことで大きな闇市が生まれ、これが戦後新橋に人を集めるきっかけとなり、新橋の復興を助けた。闇市によって新橋の町が活気づいたところを見ると、人が集ることが町としてとても重要なことだということを再認識させられる。この闇市については次章でも取り上げる。

また、敗戦の年の秋、品川駅前には戦地からの引き揚げ者で溢れていた。港区地域だけで9千人もいた集団疎開の学童をはじめ縁故疎開の人々も続々と転入し、区内の人口も急増した。焼け跡にバラックを建てたり、わずかにあった焼け残りの家にくつもの世帯が同居するなど、住宅事情が悪く、人口の増加は大きな社会問題になった。区内に都営住宅が建てられたのは1946（昭和21）年5月からで、東町・汐留・三田・白金などに小さな団地ができたが、焼石に水であった（港区教育委員会，2003，pp.84）。

「港区」の誕生～東京オリンピックによる都心の開発～

1947（昭和22）年3月、東京都は新地方自治法に備え、都内35区を22区（のちに23区）に統合することにし、芝区・赤坂区・麻布区の3区が合併して港区が誕生した。

昭和30年代に入り経済成長がめざましくなると共に、都心のビル街は大手町・丸の内から、港区地域へと伸びはじめた（港区教育委員会・港区文化財調査委員会，1972，pp.14）。そして国内の復興が進む中で、1964（昭和39）年、東京オリンピックが開かれた。これは戦後初めての国をあげての大イベントであった。このため港区内では、地下鉄工事、道路の拡張整備、競技施設の新設、ホテルの建設が空前の規模で進められ、街の様子が一変した。戦後に建てられたバラックも、鉄筋の高層ビルに建てかえられた。東海道新幹線が開通したのもこの年で、オリンピックを目標に工事が進められていた。また、首都高速が建設されたのもこの時期である。そして、1958（昭和33）年に完成した東京タワーの電波塔から、全国、全世界へ、その華やかな映像が送られた（港区教育委員会，2003，pp.84）（港区教育委員会・港区文化財調査委員会，1972，pp.14）。

2 - 2 歴史からみる新橋の変化と特色

以上のように歴史を辿ってみると、港区の中でも特に新橋地域は火事や地震、空襲によって何度もまちが崩壊し、その度にそれらに対する対策を講じて再建してきた場所であることが分かる。徳川家康がこの辺り一帯の市街地化を積極的に押し進めたことから始まって、新橋地域はいつでもまちづくりの先端を行く存在であった。ヒアリング調査をした際に、家具屋の娘さんが言った言葉が思い出される。「新橋周辺は海が近いから、なんでもすぐ海に流れる。だからこの辺りは町の変化のスピードが速いし、何代にも渡って仕事が引き継がれるということがない。何かあったら海に流してまた一から始めるのがこの土地の特徴なのではないだろうか（K商店ヒアリング, 2003）」この言葉は、新橋の場所の特色をよく表していると感じる。江戸時代から現在まで、この特色は引き継がれている。

引き継がれている特色として、もう一点気になったのは、江戸時代この場所は「埋立てなどによって計画的に造られた人工的な都市」であったということだ。現在新橋地域一帯で行われている大規模開発も、これに似たようなところがあると感じる。新橋というまちは誰かリーダー的存在（徳川家康であったり、行政であったり）が引っ張っていかねば変化していかない場所であるということもいえるのではないだろうか。現に新橋地域一帯のインフラ整備は、東京オリンピックを機に大きく進歩している。新橋は都心であるがゆえに、住民がだまっても開発が進む。だから逆に、住民がまちを創っていくという意識が養われにくいのではないかと考える。新橋のまちの特徴として、受身で保守的であるということが挙げられる。

また港区は港区単体で発展してきた地域ではなく、他地域との関係が欠かせない場所であることが分かった。丸ノ内ビジネス街や銀座との繋がり、そして鉄道開設による他地域との繋がり、これらが新橋のまちを大きく発展させてきた。戦後の闇市は、新橋駅だからこそ史上最大規模のマーケットになったのだろう。このように常に人の絶えない、また人が減少しても新たな人が入ってくるというこの土地柄がこの地域一帯を支えてきた。人がいなければ町は成り立たない。大使館が多かったことだけでなく、このような他地域との繋がりや人の活気、生活の実現の中で、新橋の地に芝家具が生まれ、発展したのである。

このように歴史を辿ってみると、昔の新橋の特色で現在も受け継がれているものが数多くあることが分かる。その土地にいる人が時代とともに変わっていったとしても、必ずしもその場所が持つ力は変化しないということが分かった。例えば新橋地域の産業が当時は芝家具であり、現在は情報産業になったことは、その姿形は変わっているけれども、これらの産業の根底に流れるもの、つまり新橋の土地が持つ力に変わりはない。逆にいうと、これらの力が変わらないからこそ、新橋の町はめまぐるしく移り変わる時代とともに速いスピードで移り変わっていかねばならないのだということがいえるのではないだろうか。

第3章 人が住む町としての新橋

さて、これまでは新橋の場所が持つ力、どのような役割を持った場所であったのかということを中心に見てきたが、この章では、町の気風、人の生活から創られる新橋の町を見ていきたいと思う。新橋に住んでいる人がどのような気風を持ち、それが新橋をどのように形作ったかを考える。今までの章では、「都心としての役割を担う新橋」というイメージが色濃く表われる結果となったが、ここでは「人が住む町としての新橋」という視点から新橋のまちを見て、新橋に住む人々がその場所に与える力を考えていきたいと思う。

3 - 1 江戸っ子の気質と新橋のまちづくり

「火事と喧嘩は江戸の華」「芝で生まれて神田で育ち、今じゃ火消しの纏いもち」。これらは、血の気の多い江戸っ子気質を最も端的に表現した言葉として世に知られている名文句である。新橋は江戸っ子の町である。私は新橋に住んで4代目となるが、普通この土地に住んで3代目からが江戸っ子と呼ばれる。新橋に長く住んでいる方にお話をうかがったところ、この江戸っ子の気質が少なからず新橋のまちづくりに影響を与えているのではないかと感じたので、ここではその両者の関係について考察してみたいと思う。

神田っ子と神田明神、深川っ子と深川八幡のように、芝っ子と芝神明とは切っても切れない繋がりを持っている。芝の神明を説明する際に忘れてはいけないのが、1805（文化2）年2月に神明境内で行われた、四つ車大八、水引清五郎などの勤進相撲と、この辺り一帯を縄張りとする火消し「め組の鳶」との間に起こった「め組の喧嘩」である（港区教育委員会・港区文化財調査委員会、1972、pp.44・45）。これは、普通の体格をした火消しが自分の2倍はあるかと思われる相撲取りに喧嘩をふっかけたことで有名で、江戸っ子の鼻っぺしが強く勢いのある様子を表している。

ヒアリング調査を行った際も、江戸っ子を語る際ほとんどの方がめ組の喧嘩の話を持ち出しており、今もなお人々の中に江戸っ子という概念が残されているのだということを感じた。新橋で製本屋を営むM氏も、江戸っ子を語る際、め組の喧嘩を一番に挙げた方の一人である。江戸っ子は竹を割ったような性格であるという印象を持っているそうだ（M氏ヒアリング、2003）。

また、約80年この土地に住んでいる履物屋のA屋さんも、江戸っ子の気風については「さっぱりしている」と語った。江戸っ子は、「皐月の恋の吹流し」「口先ばかりではらわたはなし」とよく言われたそうだ。また江戸時代には、「おせっかい」、良く言えば「困っている時は助け合う」という雰囲気があったという。この辺りは本当に江戸の下町だが、

現在はそのような雰囲気は無い、とA屋さんは語る（A屋ヒアリング，2003）。

生まれてから77年間この町で育ってきたTK氏は、新橋きっての江戸っ子として知られている。彼も、江戸っ子を語る際に、め組の喧嘩を例に挙げた。三谷氏と同じく、体は小さくともその鼻っぱしの強さで相撲人にも喧嘩をふっかける、そのような江戸っ子の心意気が印象深いようだ。

TK氏のお話の中で印象的だったのは、江戸っ子の持つ気質についての、今まで述べてきたものとは違う側面の話である。彼の話によると、江戸っ子には鼻っぱしが強いという気質を持つと同時に、目上の人を敬うなどのしきたりも強くあったそうだ。1975（昭和50）年頃以前は他の土地から新橋に移り住んできた人もいたが、それ以降は新橋の土地に新しく入ってきて定住する人はほとんどいなくなった。この現象の原因としては、日本の経済成長による新橋の地価の高騰などが主なものとして挙げられているが、その一方でもっと細かな単位で見ると、このような定住人口減少が江戸っ子の気質とも無関係でないことが分かる。TK氏によると、この土地では新しく入って来た者が前に出ようとしても江戸っ子による古いしきたりややかみが多く、なかなかそれを許さない雰囲気があったそうだ。特に戦前から戦後にかけては、新しく入ってきた人に対する「よそ者」という意識が強かったそうで、このような江戸っ子の気質が新橋のまちづくりにも少なからず影響を与えていたものと考えられる（TK氏ヒアリング，2003）。また、このような江戸っ子の持つ「よそ者」意識を、実際にこの町に途中から入ってきて感じたというW氏にお話をうかがった。W氏は結婚して奥様の実家の店である和菓子屋を継ぐため、30年程前にこの町に入ってきたのだが、当初は周りから「よそ者」意識を強く持たれ、排他的なところがあり、なかなか受け入れてもらえなかったという。やっと近頃になって、近隣の人もW氏のことを少し頼りにしてくれるようになったそうだ（W氏ヒアリング，2003）。またA屋さんも、自分は2代目なので江戸っ子のことはあまりよく分からない、と言いながらも、江戸っ子には見栄っ張りな一面があった、ということ指摘している（A屋ヒアリング，2003）。しかし反対に、23歳の時に結婚して新橋の家具屋に嫁ぎ、現在77歳になるTH氏は、「よそ者」扱いをされた記憶は特にないという（TH氏ヒアリング，2003）。よってこの江戸っ子の「よそ者」意識というのは、ごく些細なほんの一部の側面に過ぎないと捉えるのが妥当かもしれないが、しかし新橋にはこのような「よそ者」意識が少しでも根付いていたことは心に留めておくべきことであると思った。事実、新橋は鉄道開設以後発展していない土地だ、というイメージをTK氏は持っている。例えば麻布は、昔孤島だったにもかかわらず今は大繁盛しているが、新橋の様子は昔からあまり変わっていないという（TK氏ヒアリング，2003）。江戸っ子の気質は鼻っぱしが強いと同時に排他的なところがあることから、それが保守性にも繋がったということが出来るのではないだろうか。

現在の新橋に住んでいる人で、自分が江戸っ子だという意識を持つ人は非常に少ない。2代目であるM氏ですら、「まだ2代目なので自分自身に江戸っ子という感覚はあまり無

い」という。ただ、江東区深川の辺りに行くと江戸っ子気風を感じ快く思うことから、そのような江戸っ子の気風が自分にも合っているのかなと感じるそうだ（M氏ヒアリング，2003）。私もそうだが、現代においては江戸っ子気風というのは、なんとなく、ふとした時に感じるものなのかもしれないと思う。普段は自分が江戸っ子ということ意識しないが、何かあった時に思い出すのは、この土地に重みがあり、江戸っ子が重ねてきた歴史があるからこそではないだろうか。

3 - 2 新橋の祭りと地域コミュニティの形成

祭りはその町を表現するものである。人々は祭りを互いのコミュニケーションを図る場とし、またそれによって集団意識や連帯感を育み、強化してきたと考えられている（港区教育委員会・港区文化財調査委員会，1972，pp.44）。

戦後日本の中で伝統的な祭りが維持できなくなってきた地域は、郷土という集団意識の失われてきた地域であると言われている。しかし一方では、観光営利的な色彩の濃いショー的な祭りが各地に見られるようになってきたのも事実である。信仰心や地縁的な繋がりがなく、経済的な繋がりだけのレジャー用としてのお祭り騒ぎが各地で行われているが、これらはただ単に商業用、PR用の観光祭りであると考えられている（港区教育委員会・港区文化財調査委員会，1972，pp.49）。このように、地元の人々の雰囲気は祭りを創り上げる。現在の新橋地域は、町の変化が速く人口の減少などともあいまって、既成のコミュニティが失われつつある状態である。それと共に、祭りもどんどんその賑わいを失ってきた。

このように祭りによってその地域の特色が浮き彫りになることから、新橋周辺の人々の様子を地元の祭りという側面から分析してみたいと思う。

芝大神宮～神輿を担ぐ人の減少～

浜松町駅から芝の増上寺に向かう通りを大門通りという。その途中に大門の交差点があり、その大門通りの北側が芝7軒町で、その隣りが芝宮本町、そしてここに神明通り商店街と昔から神明さまで有名な芝大神宮（神明神社）がある。

この芝大神宮は、江戸っ子の神社として多くの庶民に親しまれ、広く信仰されてきた区内でも古い神社である。江戸時代には芸者も多く生まれ、芝浦育ちの気風の良さで人気を集めた。芝大神宮では戦前までは、江戸っ子の気質をそのまま反映した派手で賑やかな祭りが継承されてきた。しかし今日は人口も少なくなり、芝大神宮でも地味な祭りが細々と行われているだけである。以前は1週間に渡って祭りが続き「だらだら祭り」と呼ばれていた神明神社の祭りだが、現在は2日に短縮されている。町は急速に変化し、住んでいる

人も一定ではないため、地域の共同体としての結びつきが明らかに弱まっている。祭りを支える人々の意識も変わり、古くからの伝統を次の世代に継承していくことが今日は極めて困難である（港区教育委員会・港区文化財調査委員会，1972，pp.44）。

『東京新誌』（涌井昭治，1969）では、芝大神宮の変遷が以下のように述べられている（港区教育委員会・港区文化財調査委員会，1972，pp.50）。

昭和43年は明治100年を記念して、界わい30か町から大小40の御輿を動員した。威勢のよい若い衆が減って、御輿のかつぎ手に悩むのは、この江戸前の町も同じである。5年前の大祭では、酒、弁当、日当付で港湾労務者に応援を求めた町会もあった。

社務所では、43年は学生アルバイトを30人ほど雇入れたといっている。

このように、神明神社でも古くからの伝統を継承していくために様々な努力をしていることがうかがえる。つまりこれは逆にいうと、現在は努力をしなければ人が集らないほど地域コミュニティが弱まっているということである。私も昔は毎年この祭りに参加していたが、年々参加人数は少なくなっていると感じ、中学生くらいになると友達も行かないため私も自然と参加しなくなってしまった。現在の芝大神宮の祭りには、高齢者と小学生以下の子供が来る祭り、というイメージがある。神輿を担ぐことが集団意識を高めることに繋がるのだとしたら、現在はその集団意識の根底に流れているはずの共同体意識が人々の中でかなり減少しているのだということが言えるだろう。

現在の芝大神宮は鉄筋コンクリートで造られており、右後方には東京タワーがそびえ建っている。

烏森神社～他地域から集る神輿担ぎ～

烏森神社は新橋駅の近くにあり、現在は新橋らしい路地裏の飲み屋の奥にひっそりと建っている。

新橋赤レンガ通り発展会副会長のW氏にお話をうかがったところ、新橋で一番大きい祭りは烏森神社の祭りだ、という。この祭りは毎年5月の連休に開かれており、浅草の祭りよりも1週間ほど早いため、神輿担ぎの練習に来る人もいるそうだ。様々な地域から神輿担ぎが集るのが特色である。新橋では、サラリーマン客をターゲットとした平日の祭りも近年開かれているのだが、W氏はこれに対し、「土日を開いて人が集ってこそ祭りである」と語る（W氏ヒアリング，2003）。やはりW氏も、町にとっての祭りの重要性を感じており、現在は少しずつだが以前より人々が祭りの大切さを分かるようになってきている雰囲気があるという。

しかし、私はこの烏森神社の祭りに一度も参加したことがなく、お話をうかがうまではこの祭りが新橋を代表するような祭りであるということも知らなかった。烏森神社は私の家からは少し距離があり、また路地裏の飲み屋街の先に位置しているので、奥まったとこ

ろにあるというイメージが私にはある。それとともに、この祭りが他地域からの神輿担ぎによって少なからず支えられていることから、地元の祭りが表現する地元の力の弱体化、地元の共同体意識のテリトリーの狭さを感じた。

町会の祭り～祭りの縄張り争いから助け合いへ～

新橋6丁目東町会元町会長のTK氏に、地元町会の祭りについてお話をうかがった。TK氏のお話によると、家具屋を営んでいたTK氏宅の前の道路にも、昭和30年代前半くらいまでは簡単な舞台があって、踊りを踊る人がいたりしたそうだ。終戦直後は美空ひばりさんなどもやってきて、みかん箱の上で歌っていたという。また祭りとは関係ないが、昔は家の前の道路にごさをひいたりソファを置いたりして、その周囲に住んでいる子どもたちを遊ばせていたそうだ。しかし次第に交通規制が厳しくなり、また人が少なくなってきたため、このような風習は消滅してしまったという（TK氏ヒアリング，2003）。

また、昔はこの町会でも神輿をだしていた。神輿に関しては、私も幼い頃自分がこの町会の神輿を担いだ記憶が残っている。この町会には昔から大人の神輿はなく、子どもの神輿を子どもが担いでいた。しかし、祭りというのは神輿を飾るだけでも数十万のお金がかかり、次第に神輿を担ぐ人が少なくなったため採算が合わなくなってしまい、たたむことになってしまった。本来ならもし町会に神輿がなかったとしても、担ぐ人さえいれば神輿は借りればよいとTK氏は語る。つまり神輿の担ぎ手がいなくなってしまったのである。ただし、近隣の新橋5・6丁目や浜松町では、戦前から今もなお大きい神輿が出ている。新橋5・6丁目は、男神輿と女神輿に分かれており、他地域にもその名が知れている有名な神輿である。このように「あそこの神輿は大きい」と評判が立てば、他の地域からも人が集ってくるし、その人達を現在は受け入れているそうだ。ただ、江戸っ子の気風とも関係してか、昔は縄張り争いが激しかったため、他地域の人を祭りに入れるという事はあまり無かったという。しかし現在は人も少なくなってしまうために、他地域からも人を受け入れ、祭りを盛り上げているそうだ（TK氏ヒアリング，2003）。

現在はむしろ、他地域の人に祭りを盛り上げてもらっている、と言ったほうが正しいかもしれない。祭りがあってもなくても人が自然と集ってきた昔に地域コミュニティの存在をしっかりと感じた。神輿が、「大人」「子ども」「男」「女」と分かれているのは、これも縄張り意識の強いこの地域の特色の表われであろうか。縄張り争いができるほど、昔は人がたくさんこの土地にいたのだということを実感した。

3 - 3 新橋の町内会の変遷

第2節より、現在町の祭りの賑わいが減少し地域コミュニティの低下がみられる状態であることが分かった。では次に、地域コミュニティの状況を更に深く分析するために、祭りの中心ともなる町内会自体の運営はどのように変化しているのかを見ていきたいと思う。2つの町内会の方々にヒアリング調査を行った。

まず新橋6丁目東町会では、元町会長のTK氏、現在も役員をされているTH氏とM氏にお話をうかがった。3人ともこの土地に長く住んでいる方々である。

この土地に移り住んできて約55年になるTH氏のお話によると、昔は特に町会というものにはなかったという。ただ、TH氏の家が町内でも一番広がったため、何かあると家に人が集ってきて会議のようなものをしたそうだ。また、昔は町会でバスを借りて、皆で温泉に行ったりしていたという。しかし、現在の町内会の活動については、活発でない、と語る。温泉旅行の企画にも参加する人がいなくなった。現在の町内会活動に集る人は昔からこの土地に住んでいる人であり、昔からここに住んでいる人は、現在は1区画に1軒くらいしかいなく、町会全体でも5、6軒しかいない。現在は町内会で特にこの町の方向性を考えたりすることはないそうだ。なぜなら例えば、防犯や防災の計画を実行しようとしても、この辺りは会社ばかりでこの土地に住んでいる人がいないため、町会に顔を出す人が少ない。マンション住民はすぐに人が変わってしまうので、顔も分からない。結局少ない人数で話し合っても、実際に実行に移すことは困難という状態である。このように、現在は町会がまとまっていなかった状態だそうだ（TH氏ヒアリング，2003）。

また、新橋6丁目東町会の元町会長を務めていたTK氏は、現在の新橋に対して、活気が少ないと感じると言う。この地域は隣りの大門などと比べても、住んでいる人、商売をしている人が少なくテナントが多いため、土地への定着率が極めて低い。そして幹部がしっかりしていなく、町を引っ張っていくリーダーがいない。また、江戸っ子気風のところで述べたように、このあたりでは新しく入って来た人をよそ者扱いするところがあり、それとあいまって地価も高騰したことから、1975（昭和50）年頃以後はこの土地に定住する人が出てこなくなってしまった。そして交通の便が良いことから、様々なテナントが入っては出ていくの繰り返しとなっていた。また、昔は治安に重きを置いていたが、現在は事務所が多くなってきたので、年末に1週間やっていた火の用心も現在は3日間に短縮したそうだ。町会の役員2人が一組となって、夜の10時と11時半の2回見回りをする。それでも現在は人が少ないため、3日間やればもう巡回する人がいなくなってしまうという状態である（TK氏ヒアリング，2003）。

M氏からは町内会の運営に関する話ではないが、昔のこの地域の様子を聞かせてもらった。彼は昔を振り返り、昭和20年代の後半頃まではこの地域にも子どもが多かった、と語った。芝にある増上寺の後ろ辺りに烏山という山があり、そこでM氏も含め子どもたちはみんな遊んでいたという。しかし、次第に住民が減っていった。バブル前は地上げによ

って表通り（第一京浜）に面した所から人が少なくなっていき、今は不況で違う土地に移っていく人が多い（M氏ヒアリング，2003）。

以上のような話から、新橋6丁目東町会では、町内会としてのまとまりや集団意識が希薄になっていることが分かった。昔は町会など無くても、何かあれば家に人が集ってきたという状況が印象的である。現在のこの辺りの住宅形態は、マンションばかりになってしまった。そのような住宅形態に変化しただけでも、これが敷居を高くし、隣同士の繋がりを希薄にするだろう。さてでは、他の町内会はどのような状態なのだろうか。新橋赤レンガ通り発展会副会長であるW氏にお話をうかがった。

W氏は30年程前、奥さんの和菓子屋を継ぐためにこの土地に入ってきたが、その頃と比べると商売は沈静化しているという。赤煉瓦通りの商店も少なくなった。現在は、この土地で商売をするよりも、この土地をテナントに貸したほうが儲かる時代である。しかしW氏は、だからといって商売を辞めてしまうのではなく、「それでもなんとかしていこう」という気概を大切にしていきたい、と熱く語ってくれた。最近の新橋は人口回帰の兆しが見えるというが、戻ってきたのはお国の違う人であり、必ずしも定住人口が増えたわけではない、ということを感じているようだ。また、これは赤煉瓦通り町内会だけの計画ではないのだが、今年（2003年）の12月に新橋一帯に60個の防犯カメラが設置されることになっている。これは汐留の再開発（場外馬券売り場の設置）などに関係してのことかもしれないが、とにかくこれほどの数の防犯カメラは日本一である。このカメラがあることで、この地域一帯の犯罪抑制に繋がればとW氏は期待している（W氏ヒアリング，2003）。

赤煉瓦商店街には、私の幼い頃は今よりももっと多くの商店があったことを私は記憶している。肉屋や魚屋、文房具屋など、これらの個人経営の店はどんどん無くなってしまった。現在赤煉瓦通りを歩いてみると、テナントが多いという印象を持つ。この状況を目の当たりにすると、やはり都心での生活は難しいのだろうか、と感じざるをえない。しかし反対に、W氏のようにそれでも何とか商売をがんばっていきたい、という人もいることをとても嬉しく思った。W氏のこのような言葉を聞いて、町にとって大切なのは、一人一人がこのように、この場所への愛着心を持つことであると感じた。実際現在は防犯なども町内会単位ではなく、もっと広い範囲で行われていることから、今後は、町内会という枠を越えた取組みが必要なのではないかと考える。次章で述べる芝家具商は、普段はそれぞれが独立していたが、親睦的な組織はつくっており、何かの時には共同で作業を行っていた。現在の新橋は、地域コミュニティは希薄だが、たまには共同で何かを行ったりすることが、普段それぞれが独立して暮らしているぶん刺激となり、町の活性化にも繋がっていくのではないかと考える。

3 - 4 新橋に暮らす人々とその商売

明治政府は、「富国強兵・殖産興業」のスローガンのもとに欧米列強を目標にして近代化政策を進めた。1870（明治3）年には工部省が設置され、政府の手によって富岡製紙工場をはじめ多くの工場、鉄道、鉱山などが直接経営された。そして1900年代の日本は、それまでの軽工業主体から重工業主体の工業に変わる時代である。明治30～40年代にも工場数、労働者数が増え、第一次世界大戦後には、新橋一帯は京浜工業地帯の一角を形成することとなった。そして、東京湾に面した芝区は、京浜工業地帯の一角として東京市15区の中でも屈指の工業地帯に発展した。港区内における明治時代に設立された主な民間工場は、その多くが芝区の古川流域に集中している。芝浦製作所・日本電気など今日でも大企業として知られる工場をはじめ、多くの大工場が芝浦の埋立地や、田町、三田に集中した。また、古川流域には中小の工場が集ったほか、愛宕下に洋家具の製造・販売店が集り生活の洋風化に対応する新しい産業として定着した。このように、港区、とりわけ芝地域は、日本の近代工業の発展において大きな役割を果たした（港区教育委員会, 2003, pp.76・79）。

現在新橋の自営業者は、昔と比べて減少している。そんな中で現在も自営業を続けながらこの地で暮らしている人が、今までどのような生活をしどのような商売形態をとってきたのか、現状はどのようなものかを探った。同じ自営業者として芝家具の盛衰にも共通する部分があると思うので、これらの自営業者の流れを捉えることで、新橋のまちの動きを見ていきたいと思う。

印刷業・製本業～21世紀はペーパーレスな時代～

新橋において有名な商業というと、たいてい一番か二番に挙げられるのが印刷屋である。当時この地域には印刷屋、製本屋が数多くあった。東新橋2丁目で、ご両親の代から自宅で製本業を営んでいるM氏のお話を中心に、印刷業・製本業の変遷とまちの変化を見ていきたいと思う。

M氏が持つ「新橋の商業」の印象は、家具屋や印刷屋、製本屋が多いということである。製本屋については、印刷屋が多かったから製本屋も多くできたのだろう、とM氏は推測している。ただ勘違いしてはならないのは、印刷屋や製本屋はこの地域が特別に多いというわけではない、ということだ。文京区などはもっとまとまってこれらのものが存在しており、印刷業や製本業が必ずしも新橋特有の産業ではないということは心に留めておかなければいけない。

印刷屋や製本屋の件数の変遷は分からないが、この2種が現在不況業種であり数がどんどん減っていることは実感しているようだ。バブルがはじけてからは、全体的に仕事の量が減ったという。

印刷業の流れは、企画から印刷、製本という順番になっている。印刷と製本は未だに仕

事として分かれているようで、この中で最も低い下請け業に位置しているのが製本業である。なぜかという、企画や印刷で期日が押されたとしても、製本屋は期日通りにものを納めなければいけないからである。また利益幅も少なく、若い人も集らないので平均年齢が高いそうだ。

M氏は、「製本業は21世紀の仕事ではない」と語る。これからはメールなどが主流となり、ペーパーレスな時代になっていくだろうと分析している。バブル期にたくさんできた製本屋が現在はそれぞれ生き残りをかけてきたので、今は業種内での戦いになっており、今後ますます淘汰されていくと考えられる。中堅どころでは息子に店を継がせるところもあるらしいが、M氏のご子息はこの店は継がないそうだ（以上、M氏ヒアリング、2003）。

この話を聞いて、確かに今後はペーパーレスな時代になるため、印刷業・製本業は苦しい時代を迎えるだろうと思った。息子は幼い頃からこの店は継がないと言っていたようで、そこからは製本業自体の魅力の減少もうかがうことができる。また、M氏も先の暗いこの職業を息子に継がせる気はあまり無いらしい。新橋で商売を営むことは、高い土地代や敵対する大企業のことなどを考えると、なかなか困難である。製本業という職業自体が苦しい状況に置かれているうえに、このような土地柄が絡んでくることは、自営業の人にとってはとても苦しい。M氏の家では現在も汐留再開発が着々と進んでいる。大企業の進出が個人経営の店を追い詰める、というのはよくある話だが、都心においては再開発で一気に大企業が押し寄せてくるため、状況は一層難しいといえるだろう。このような製本業の変遷を見ると、新橋という都心における地場産業発展の難しさを感じさせられる。

履物屋～17軒あった履物屋が1軒に～

新橋駅のガード下から大門通りまでを繋ぐ第一京浜の裏通り（新橋6丁目周辺）は、古くから日蔭町通りと呼ばれ、特に古着屋の通りとして有名であった。TK氏のお話によると、この辺りは大名の武家屋敷が多く、この日蔭町通りにはその妾が多く住んでいたために「日蔭」町と呼ばれていたのだという。日蔭町という名の由来は書物に記されているが、このような意見ではなく、これは長くこの土地に住んできた人ならではの地元生活に根付いた言葉であると思った。日蔭町通りは距離が長く、ここには昔3つの商店街があって、住民の生活に欠かせない場所であった。しかし現在はほとんど商店は無く、テナントが多い。日蔭町通りにある3つの商店街のうちの1つ、新七会商店街で現在も唯一商売を営んでいる「A屋」という履物屋さんにお話をうかがった。彼は約70年、この土地に住んでいる。新橋の町の様子や日蔭町通りの商店街のことを語ってくれた。

江戸時代は、書物にも記されている通り、東新橋とここの新橋6丁目周辺は大名屋敷があったそうだ。昭和の始めから昭和20年頃（戦争が終わる頃）までは、日蔭町通りの両側には小売店が軒を連ねており、日常生活に必要な物はこの通りに来ればほとんど間に合ったため、いつもとても賑わっていたという。小売店の中でも、特に古着屋と紳士服屋が多かった。近くにある神明神社では、毎月7の付く日（7日、17日、27日）に縁日を

開いており、それにも周囲の人などがたくさん集ってきた。彼はその頃まだ子どもだったので、夜寝ようとしている時下駄の音をよく聞いたのを今でも覚えている、という。食事後に日蔭通りを散歩する人、買い物する人もいて、夜になっても人通りが多かったそうだ。このような賑わいは1943（昭和18）年頃まで続いた。1935（昭和10）年頃には日清戦争なども起こったが、その頃もまだ賑わっていたという。また、昔は3つの商店街で連携して、暮れに売出しなどもしていたそうだ。当時は街灯が無かったので、家から道路を挟んだ反対側の家へ向けて、道路の真ん中に裸電球を吊るしていた。その後昭和10年代に街路灯ができた。

しかし、太平洋戦争が始まり物資を戦争に向けなければいけなくなると、物資が無くなってしまった。また物資統制令も出され、自由に物を売れなくなった。これらのことから店を閉めるところが多くなり、だんだんと賑やかさが失われていった。

また、1945（昭和20）年5月の空襲でこの辺りは焼かれてしまった。そしてこの年の8月に終戦を迎えた。当時この辺りの商売人には地主が少なく、建物だけを借りて商売をしている人が多かった。そのため、終戦後に疎開をすると、その後もう一度この土地に戻ってくる人と来ない人で分かれてしまった。地主でない人は、建物が焼かれてしまえば土地は自分の物ではないのだから戻ってこられなかった。戻ってきた人は約半分。それでもまだお客さんが買いに来たそうだ。

しかし高度経済成長期に突入し、土地の値段が上がった。土地が良い値ならということで、ここで商売をしていない人がまずこの町を離れていった。周辺も同じ状況だった。そしてだんだんと住民が減っていったため、この地で商売をやってもお客さんが来なくなっていく。そんな状況の中バブルになり、土地を売れば新しい暮らしができるのではないかと考えた商売人がこの町を離れていくようになった。そして通りも廃れていった。空いた土地には、土地の値段も高いため小さい会社は入れず、大手の会社やテナントが入るようになった。

バブルの時の地上げ、そしてその後のバブル崩壊で、今では空地もできてしまった。住民と新しく入ってきた事業人との間に特に関係はない。企業もこの町に住んでいるわけではないので、この町に対する関心がないだろう。今は、昔とは暮らし方が違うと思う。昔は店の中から外を通る人が見えたり、目が合えば「こんにちは」などの挨拶を交わしたものだ。現在この辺りに住んでいる人は少なく、マンションに住んでいる人の顔はあまりよく分からない状況だ。昔の賑やかさは一体何だったのだろうと思う。うちの商店街の中でも、物を売っている店はうちだけになってしまった。昔は同業者（履物屋）がこの3つの商店街に17軒もあった。それでもそれぞれの店が暮らしていけるほど各店とも繁昌していた。しかし今はうちの1軒だけになってしまった。現在はこの辺りに長く住んできた人にとっては「不安の時代」だろう（以上、A屋ヒアリング、2003）

3 - 5 新橋の住民による新橋のまちづくり

本章では、新橋の住民がいかにこの町を創る力を持ち、それを活用しているかということを中心に見てきた。分かったことは、現在の新橋の地域コミュニティはとても力が弱いということである。祭りや町内会の衰退は、人々のコミュニケーションの希薄化を的確に表している。昔の排他的な江戸っ子気質が「よそ者」を受け入れなかったのだが、当時はそれでも町に活気が溢れるほど地域コミュニティがしっかりとしていた。排他的で保守的な性質を江戸っ子が持っていたとしても、それでも町は進歩していったのだ。3節に記載したヒアリングの中に、「現在は町を引っ張っていくリーダーがいない」という言葉があった。確かに江戸っ子時代には、その排他的な雰囲気を保っていくチームのようなものが存在し、そこにはリーダーがいたのだらうと推測できる。それでもその地域の雰囲気が排他的であれば、リーダーがいたとしても当時から現在までの間にこれほどの町的发展を見ることはできなかったであろう。つまりこれは、新橋の町が持つこれらの気質を越える何か強い力がこの町には作用しているということなのではないだろうか。

現在は、この土地で自分で商売をするよりは、この土地をテナントに貸したほうが儲かる時代である。この地域での自営業は、土地の値段が高く敵対する大企業も多いため、大変困難だということが分かる。また、住民の人数が少ないので売り上げも伸びない。そして商店街の中に空き地が見られるようになるが、そこに高い値段を払って入ることができる自営業者はほとんどいない。このような悪循環が、この地域での自営業を困難にし、地域コミュニティの低下をもたらす要因の一つになっていると考える。また、土地の高騰による人口の流出やマンション増加による土地への定着率の低さなど、これらの地域外からの力によって、当時の排他的・保守的な気質がそのまま現在の受身的な気質に引き継がれていったのではないだろうかと考える。

では、この町の地域コミュニティを高め、まちを創ってきたものは一体何だったのだろうか。排他的な気質がある中で住民同士まとまっていたのは、この土地に対する愛着心があったり、人々がそれぞれ自分に対して誇りを持っていたからなのではないかと考える。「ここは自分たちの土地だ」という強い思いがこの地域への愛着心となり、それが外部からの力によるこの町の開発とうまく織り合い、バランスがとれたからこそ、この町は発展していったのではないだろうか。外部からの力は確かに強いものであったが、それだけで町が形成されているわけでは決してないと考える。だから、開発が進んでも江戸っ子という概念が根強く人々の心に刻まれているのではないだろうか。

このような中で、100年以上に渡って続いた芝家具業とはどういうものであったのかということに非常に興味を持った。ヒアリング調査の際にも、新橋地域の商業として洋家具屋である芝家具が有名であったことが明らかになった。「この辺りは食べ物屋（飲食業）が1位で、家具屋（金物屋などを含む）が2、3位だった」と元家具屋のTK氏は語る。芝家具業は新橋を代表する地場産業である。今まで見てきたようなこの土地やここに住む

人々の性質と芝家具業はどのように絡み合い、繁栄を遂げたのであろうか。

芝家具と同じく発展した商業に、靴屋を挙げることができる。明治初期に特に有名だった工場としては、1865（明治2）年に芝区露月町（現港区東新橋）で創業した大塚靴工場が挙げられる。ここでは、特に1878（明治10）年の西南戦争によって軍靴の需要が増え、生産が拡大したという。その後も日清・日露の戦争とともに発展してきた（港区教育委員会，2003，pp.76）。このような生活の洋風化に伴う新橋での商業は、芝家具と似たところがある。これらは都心だからこそその先進的な活躍をすることができた、この土地特有の商業であると考えられる。

このような都心としての土地柄と人々の気質を含め、都心である新橋における地場産業についてその特色や町にとっての重要性を考えつつ、これらの商業が新橋の町を表現するものになりえるのかどうかを次章で考えていきたいと思う。

第4章 芝家具が表現する新橋の個性

4 - 1 現在の赤煉瓦通り

赤煉瓦通りとは、第一京浜という大きな通りと平行して走っている通りであり、新橋駅から徒歩約5分のところにある新橋4丁目の中にある。ここ一帯は当時、芝家具屋が多くあり、芝家具業の中心地帯として位置づけられていた。私が幼い頃は、肉屋、魚屋、文房具屋など自営業の店が多く立ち並んでいた。しかし現在は商店も少なく、ほとんどがテナントとなっている。また、新たに新橋の地にできる環状2号線という大きい道路がこの赤煉瓦通りと垂直に交わるように造られるため、環状2号線建設後、赤煉瓦通り商店街は2つに分断されてしまう。またちょうど環状2号線が造られる土地に店がある人々はそこを立ち退くことを余儀なくされ、これを機に商売を辞める人、赤煉瓦通り近くの一回り小さい土地に店を移転する人など、その選択は様々である。環状2号線建設については、次章で詳しく述べる。

この赤煉瓦通り一帯で洋家具の生産が盛んとなり、芝家具といえは高級一品生産で知られるまでに名を挙げた。しかし現在は赤煉瓦通りを歩いてみても、洋家具の店は見当たらない。新橋の地場産業にまで発展した芝家具が、新橋の町をどのように表現し、新橋の町にどのような影響を与えてきたのか。芝家具業には新橋の土地柄や人柄、都心としての特色が色濃く表われている。芝家具の変遷を辿りながらそれらを鮮明にしていくことで、新橋の町における地場産業の力を分析し、商業が表現するこの場所の個性を探っていきたいと思う。

4 - 2 芝家具の変遷

洋家具の来日と芝家具の誕生

洋家具は、中世・室町時代頃に、西欧から日本へもたらされたものと考えられている。しかし当時の洋風家具は、日本人の暮らしにとって縁遠いものであった。洋家具が日本で花開いたのは、文明開化以降である（俵・中村・吉沼，1966，pp.5～6）。江戸時代末期、アメリカやイギリスなどの国々は日本の開国を強く要求し、それとともに西欧の物が日本に流れ込むこととなり、洋家具もこの流れによって日本にやってきた。

もともとは、1859（安政6）年横浜に外国人居留地が設けられた際に、日本で初めて洋家具業が築かれたと考えられている。横浜開港の3年後、1862（文久2）年の『横浜見聞録』には、

見世さきに腰打かくる椅子あって（洋人に）之を出す。之にかかりて、巻煙草をくすへ、摺付木にて呑（石井研堂『増訂明治事物起原』昭和19年所引）

と記されており、この記述から、当時日本人のためにではなく往来の外国人のために、日本人が洋家具を調達していたことが分かる。調達するからには、その他に洋家具の修理などの仕事も日本人が行っていたということが推測でき、このようなことから洋家具が日本に広がり始めたと考えられている（俵・中村・吉沼，1966，pp.9～10）。

しかし前述したように、日本での洋家具業が盛んになったのは、明治維新（1868年）以後である。椅子を官庁で実際に用い始めたのが1871（明治4）年8月からであり、その年の12月17日に初めて靴での登庁を許したという（石井，1944）。このような時代の風潮に乗るかたちで、芝家具は誕生した（俵・中村・吉沼，1966，pp.13）。文明開化時代の到来とともに、芝家具は洋風家具の中心的存在となり、頂点的地位を占めた。この芝家具の歴史はその後100年以上に渡って続いたという（俵・中村・吉沼，1966，pp.5～6）。

ちなみにここでいう芝家具の「芝」は、主として現在の港区の新橋（各丁目）、西新橋（各丁目、田村町含む）などの一帯を指し、さらにその系統に属するその周辺をも含めて言っている。

芝家具店第一号と生産分布

芝で家具店を開業した一番手は、当時東京府第2大区4小区琴平町1番地（現在東京都港区虎ノ門1丁目）の木下商店である、といわれている。開業は1874（明治7）年。虎ノ門の木下商店と称され、「仕事をおぼえるなら木下へ」とうたわれた。明治維新後まもなく人口も激減して世情も不安定だった東京へ、彼がどんな事情と意図のもとに出て来たのかははっきりと明らかにはなっていない。しかし、上京後アメリカ大使館員と懇意になったのがきっかけとなって、在京外国公館の使用家具の修理をするようになったといわれている。自ら求めた商売というよりは、周りの状況から求められていたことに応えるといった形で始まった商売と考えられている（俵・中村・吉沼，1966，pp.14）。このことから、当時から新橋という地域が、海外との関係において非常に重要な位置を占めていたことが分かる。日本人によって商売が立ち上げられたのではなく、間接的ではあるが新橋周辺に居住する外国人によって商売を誘導させられたことは、新橋地域の一つの特徴として挙げられるだろう。

この時代注目すべき点は、この頃の洋家具生産地域の分布が、1965（昭和40）年頃の芝家具業集中地帯をすっかり外れている、ということである。当時の家具生産地は、現在の中央区が大部分を占めており、次いで港区の地域も多いがしかし、港区の中でも三田方面と赤坂田町方面に生産地があった。これは、その後の芝家具中心地帯である港区芝新橋、芝田村町（西新橋）、芝浜松町などに最も近い場所でも芝中門前2丁目とやや離れていて、ちょうど芝家具業地を飛びこした形で分布していたのである。この理由は、江戸時

代の土地利用に関係していると考えられている。当時の生産地域を全体にみると、江戸時代の武家屋敷でなかったところで、しかも町屋ではあっても商業地でなかったところを見ることができる。反対に新橋・田村町付近は、大部分が大名・旗本の屋敷であり、そうでないところは繁華な産業地であったので、新時代の産業の動きに新橋周辺地域は即応することができなかつたのではないかと考えられている。このことから、新橋は江戸時代からひき続いた市街が、明治維新後の新しい東京という都市の形成に即応しなかつたことが明らかにされた。つまり、現在の芝家具は東京が中央集権国家の首都としてしっかりと体制を整えはじめるとともに成立したと推測することができる（俵・中村・吉沼，1966，pp.25～26）。

このように、市街の開発状況が芝家具発生に関係したということが分かる。新橋地域の住民たちによるまちづくりの進展の遅さは現在も指摘されており、当時からそのような性格が新橋にはあつたのではないかと考えることもできる。ヒアリング調査を行った際、約80年新橋に住むTK氏が第3章で、「新橋は鉄道開設以後発展していない土地だ。麻布は昔孤島だったにもかかわらず今は大繁盛しているが、新橋の様子は昔からあまり変わっていない（TK氏ヒアリング，2003）」と述べていたことから分かるように、新橋は鉄道敷設以後も「住民主導による町の発展が遅い」という性格を引き継いでいた。新橋は洋風家具発祥の地であることから、海外との連絡地となつていることが分かり、江戸時代に引き続き明治時代以後も都心であつたことが分かる。しかしどの時代でも新橋の町の開発に遅れが生じるのは、やはり新橋にそのような土地としての特色や住民の特色があるからではないだろうか。

また生産分布の注目すべき点としてもう1点挙げられるのが、芝家具と烏森稲荷の関係である。芝家具の草分け商店5軒の所在地を見ると、5軒中3軒が烏森町（現新橋2丁目）に集中していることが分かる。ここは、江戸時代は武家の屋敷地であつた。それが1872（明治5）年以降、烏森稲荷の存在が核となつて、繁華な門前街を築くこととなつた。また同年、新橋駅（現在の新橋駅ではなく昔の汐留駅のこと）が開業したことも、この地を繁栄させることに大きな影響を与えたと考えられる。このように、現在の赤煉瓦通りに家具屋が集中する前に、繁栄地である新橋2丁目に家具屋が3軒ほどあつたことは注目すべき点である（俵・中村・吉沼，1966，pp.47～49）。烏森稲荷については、第3章2節の祭りのところでも取り上げたが、神社周辺に町が生まれるということで、町にとっての神社の存在を改めて感じさせられた。現在はただ参る時にだけ行くと捉えられがちな神社も、当時は人が集る場所であり、そこから町が発展していったのだということが分かつた。逆にいえば、神社や祭りに人が集らない現在は、町の発展も乏しいのだということを再認識した。現在の新橋は行政によるまちづくりが主体であるが、この当時はまだ地元に根付いた場所から町を創っていくという潜在能力があつたのだということが分かつた。

芝家具中心地帯の芽生え

1872（明治5）年に、現在の芝家具中心地帯に2軒の家具屋が開かれたことが記録として残されている。これが事実上の芝家具発祥と考えられている。この2軒とは、「丹後屋」と「尾張屋」である。丹後屋の創始者は竹中善助といい、幕末の神奈川奉行竹中丹後守の示唆で、芝愛宕町（現西新橋）の通りに、2間間口の洋家具店を開いた。また、尾張屋の創業者は仲井和助といい、当時若干24歳であった。店の場所は、東京府第2大区4小区愛宕下町3丁目1番地（現港区新橋5-32-2）であって、新開の旧武家地の真っ只中であつた。愛宕ノ下大名小路に面し、幕末には井上遠江守の屋敷があつた場所で、尾張屋の開業当時は町とは名ばかりな状態であつたに違いないとされている。初代の仲井和助が、どのような縁故でこの地を開業の場所に選んだかは伝わっていない。しかし、この尾張屋の位置が、その後の芝家具業集落地の中心ともいふべき所を占めており、この1872（明治5）年に地理的に芝家具の発祥があつたというふうにみられている（俵・中村・吉沼，1966，pp.28）。この年はちょうど新橋鉄道創設の年でもあり、芝家具誕生は鉄道開設とも関係があつたのではないかと考える。前述した横浜での家具業発祥も外国人が居住していたことと関係があつたように、この新橋周辺地区でもその土地にあるもの（烏森稲荷や新橋駅など）が芝家具発祥と関係している。このことから、地場産業の発祥や継続は、そこに住む人々だけでなく、その「場所」が持つ特色や力が大きく関わっているのだということがいえるだろう。

また1874、75（明治7、8）年には工場制機械工業化が始まり、産業界における明治維新が起こつた。しかし芝の洋家具は、その需要との関係から工場制手工業を選択した。新橋が都心の純商業街、あるいは官庁・ビジネス街、さらには大邸宅街ともつかず離れずあることが、需要との関係で最適の条件となつたと考えられている（俵・中村・吉沼，1966，pp.53~54）。そして、1874（明治7）年には、芝家具中心街ともいふべき愛宕下町（現在の新橋4・5・6・7丁目）の新興ぶりがみられている。高級洋家具としてしられる芝家具の中心地は、この愛宕ノ下大名小路、後の赤煉瓦通り（現在新橋4丁目）におかれた（俵・中村・吉沼，1966，pp.31）。

芝家具の確立期

このように、明治10年代を芝に洋家具業が定着してきた時期とみれば、次の明治20年代はその確立期に当たる、ということが出来る。明治20年代は、生田・堀・鳥羽・宮崎・玉置などといった多くの家具屋が芝で開業、独立した。また、杉田・清水等が渡欧した時期でもあり、彼らは海外の家具を学んで帰国した（俵・中村・吉沼，1966，pp.61）。芝家具は地場産業でありながらも、洋風家具というその性質上、他の地域（特に海外）との繋がりが深い産業となっている。このことから、芝家具は都心である新橋だからこそ生まれた産業であるということが出来るだろう。

またこの明治20年代頃は、東京で洋風建築が目立ち始めた時期でもある。丸ノ内の三

菱ヶ原を始め、東京の各所に西洋建築が続々見られるようになった。西洋建築の増加は、必然的に洋家具の需要増加をもたらす。この頃すでに洋家具の使用は始まっていたが、真の浸透ぶりを見せるのは、この明治20年代からであったと考えられている。建築家ジョサイア・コンドルの来朝は1877（明治10）年で、1883（明治16）年には日比谷に有名な鹿鳴館を完成しているが、一般邸宅建築に手腕を見せるのは30年代である。ちょうどその中間の20年代にニコライ堂、日本銀行、海軍省、司法省、東京府庁、そして三菱ヶ原と呼ばれた丸ノ内ビジネス街などの会社街の建設が見られ、日清戦争後の好況もあいまって洋風建築の浸潤期となったのである（俵・中村・吉沼，1966，pp.66～67）。このように明治20年代に建てられた西洋建築の場所を見ると、新橋から近い位置にあるということが分かる。西洋建築の先駆けとなった丸ノ内、その近くに位置する新橋、この両者の関係が芝家具の需要をもたらした。西洋の物を一早く取り入れられるのが都心であり、だからこそ新橋で芝家具が栄えたのだと考える。

芝家具の隆盛

その後明治30年代に入ると、赤煉瓦通り（現在の新橋4丁目）に店が勢ぞろいしはじめ、芝家具の名を高らしめることとなった。洋家具が普及し、椅子やテーブル、ソファも一般庶民にとっても珍しいものではなくなったのもこの頃からと考えられている。しかしだからといって、一般庶民が芝家具を使用していたというわけではない。芝家具はいつの時代も「高級」が売りであり、一般庶民の生活と交わることはなかった。つまりは、日本の上層階級、皇室をはじめとして、宮家、華族、財閥、それに高級官僚、政治家等にとって、洋家具が単に異国の調度品という以上の実用品となったということである。小沢慎太郎商店は、この時代を以下のように述べている（俵・中村・吉沼，1966，pp.86）

明治30年代の洋家具需要の大きさは、その供給能力からみればはかり知れない感じがした。著名な店舗を数えたてても、杉田屋、寺尾、木下、清水以下相当な数にのぼったが、その製作量は現今の生産量からみれば知れたもので、仕事はどの店にも常にかかえきれぬほどであった。（記録編第一章諸店誌・小沢慎太郎商店）（俵・中村・吉沼，1966，pp.473～478）

また、明治30年代後半には日露戦争が勃発し、これも芝家具に大きな影響を与えた。この戦争によって、芝の家具業者が海外への進出を見せたのである。その一つは、すでに戦争中、時の戦場であった満州（現中国の東北地方）方面向けの軍用家具類の入札に、鳥羽商店がしばしば参加して落札し、納品に成功していたということである（鈴木義正氏談）。その他にも、上海と香港の日本郵政支店や朝鮮総督府庁舎・官舎の室内装飾と家具製作のため出張を命じられて渡航した人もいる。また、満州一帯の軍用施設にも進出した。農商務省の用命を受けてセントルイス万国大博覧会のために出張した人もいる。このように明治30年代は、日本の家具技術を海外へ知らしめた時期となった（俵・中村・吉沼，1966，

pp.98～99）。

また明治30年代には、もう一つ注目すべき特徴がある。それは、芝家具商と百貨店（飯田高島屋）とが連携し、芝家具の販売において新しい様相を加えたということである。大きな需要に対しては大きな販売力が必要であると芝家具商が判断したことから、両者の連携は結ばれた。需要者の利便性を考えても、これは当然の流れであったといえる（俵・中村・吉沼，1966，pp.103）。

このように明治30年代は、芝家具の様々な面が広がった時代、ということができるだろう。首都東京における洋風化の定着は芝家具業の需要増に繋がり、つまりこの芝家具の需要の変化が日本の洋風化の程度を表すバロメーターの役割も担っていることが分かる。また、芝家具の海外進出や需要増によって、販売戦略も必要となった。今までは経営術などはそれほど必要なかったが、この辺りの時代からはそれらも求められるようになり、芝家具を扱う人材も今後変化していく兆しがこの時代には見えていると感じる。

芝家具の変化

明治から大正にかけての時期は、芝家具の声価が対社会的にも確立し、赤煉瓦の諸店が同じ通りに軒を競って繁栄する、その基礎を仕上げた時期となったと考えられている（俵・中村・吉沼，1966，pp.105）。

1907（明治40）年頃、永井源治の二源商会と清水米吉の清水製作所が独立開業した。この際、芝家具にちょっとした変化をみてとることができる。それは、二源商会を開業した永井源治が東京高等工業学校図案科の出身者であるということだ。学校出の経営者が出たことに、洋家具の歴史の推移を明らかにみることができる（俵・中村・吉沼，1966，pp.111）。

また、この二源商会は麻布の永坂にあり、清水製作所は赤坂の高台にあった。いずれも芝家具地区から少々離れた場所に位置していることも注目に値する。このことについては、この頃すでに芝家具の中心地に新規開業の余地が少なくなるという町況の変化があったからではないだろうか、と考察されている。この現象から、東京での純市街地の拡大が感じられる。このような芝家具地域の拡大は、芝家具の力を表しているといえるだろう（俵・中村・吉沼，1966，pp.111～112）。

明治40年代は、東京という都市の市街の性格が定まり、洋風化が地についた時期でもある（俵・中村・吉沼，1966，pp.118）。今までみてきた芝家具の変遷からも分かるように、建築物や市街の状況と家具の在り方には切っても切り離せない関係がある。このことから、芝家具は明治末から大正にかけて、安定した時代に突入したということができるだろう。

また、明治30年代の流れを受け継ぎ、やはりこの頃から芝家具業に携わる人に学校出身者が現れた。芝家具の土地の広がりとともに、芝家具の方向性がかなり広がっていることを表していると考えられる。

それとともに明治末期は、退職独立する者を輩出する時期でもあったことを心に留めて

おきたい(俵・中村・吉沼, 1966, pp.124)。

大正初期・中期

1915(大正6)年の東京府農商課編纂『東京府生産調』第二十四によると、そこには西洋家具を掲げて、「芝区ヲ第一トシ」と記載されている(俵・中村・吉沼, 1966, pp.152)。この記載からも、芝家具が大正期もまだまだ隆盛であったことが分かる。大正初期・中期の芝家具の様子を以下に挙げてみたいと思う。

1916(大正5)年、洋家具業者の団体「東京家具装飾協和会」が誕生した。この協和会は洋家具業者中、特に有力な人々が集って創設したもので、親睦的なものながら年1回の大蔵払いなど残品特売なども行って好評で迎えられるなど、なかなか意欲的な企画もあったそうだ。有力、高級で研究熱心な業者が芝に多かったことから、この協和会が芝家具の進歩に大きな役割を果たしたものと考えられている。また、その後の芝洋家具業者の心理的団結にも大いに影響を及ぼしたとされる(俵・中村・吉沼, 1966, pp.144)。家具という産業はその性質上、一種芸術的な面があり、特に芝家具は高級一品生産を売りにしているためその傾向が強い。そのため家具業というのは、組織ぐるみで画一的に行うものではない。だからこそ、ここでは「親睦的」な団体が生まれたのであろうと考える。

また、この頃の芝家具の意欲と余裕とを物語る事実として、この時代に不相応と思われるほどの高学歴者を受け入れたことを挙げることができる。このようなところに、芝家具の贅沢さの一面を見ることができる。芝家具の持つ余裕が、高い水準を目指すことに繋がっており、そのことが結果的に芝家具の高い水準を維持することになったと考えられている。この業界では、東京帝国大学(現国立東京大学)出でも年季奉公の叩き上げでも、それぞれに通用し持味を活かすことができ、それが芝家具の重要な特色であると考えられている(俵・中村・吉沼, 1966, pp.144~146)。現在の社会はその企業ごとにだいたい同じ水準の人が集るといった傾向が強いが、この芝家具業には様々な経歴を持った人が集っており、それが結果的に芝家具業に広い視野を与えることになったのではないだろうか。

また、この頃から芝家具の経営の分化が始まった。芝家具は、商売から企業へと形態を整え分化専門化することによって、営業規模の拡大に備えた。これはまた、親族にひとつの働き場所を与えるという、芝家具業者の独立進取の精神ともいえる(俵・中村・吉沼, 1966, pp.148~149)。ここで気になるのは、芝家具業は家族・親族でその商売を成り立たせようとする傾向が強いということである。他からの人を受け入れる一方で、自分の店は自分の家族・親族に継がせるといった意志があるため、一つの店が長続きしないという印象を受ける。弟子として入ってきた人がその店を継ぐことは少なく、ほとんどが独立してしまうため、その独立先でも同じように家族・親族への受け継ぎが起こる。この点は芝家具業の特色として注目すべきところであると考ええる。

またこの時代のもう一つの注目点は、1921(大正10)年に芝愛宕町1丁目8番地に野沢工業所が開業したことである。何に注目するかというと、この工業所の主人である

野沢仙太郎が、創始者として初めて芝に生まれ育った人物である、という点である。彼は、表通り裏通りを家具の店舗や仕事場が群れている中で、自然と家具屋になったという。このことにより、まさに芝家具は、その中で育った人間を家具屋として一本立ちさせるほどの歴史を経て来たということができ、これは注目に値するものであろう。また、この野沢が、芝で早くも大衆向きの既成家具の製造販売に取り組んだことは画期的な出来事である。これは芝の主流とはなりえなかったが、その着目が芝において、しかも生粋の芝っ子によって行われ、かなり早かったことは、芝家具の持つ特徴として挙げることができる（俵・中村・吉沼，1966，pp.151）。野沢工業所については本章の3節で詳しく述べる。

関東大震災前の赤煉瓦通り

関東大震災前の赤煉瓦通りを表す言葉として、「赤煉瓦十三軒」という言葉がある。この13という数字は、この時代の赤煉瓦通りにあった家具屋の数をぴったり表したものであるというわけではないのだが、このような言葉が生まれるほど赤煉瓦通りの家具屋が流行っていたということが分かる。しかし図表4-1の芝家具店分布図を見ても分かるように、芝家具はその密度はあるがだからといって、これらの家具屋が軒を連ねていたというわけではない。また、赤煉瓦という表通りから一步横丁裏通りへ入れば、そこにはいたる所に下請けや自前の親方、職人、徒弟たちの仕事場があったそうだ。積み重ねられた仕掛品とともに塗料の匂いや木屑の香りが立っていたそうで、これらは芝の生活の様子をとともよく表している重要なものである（俵・中村・吉沼，1966，pp.161～163）。

以下の文章は、中村富夫氏が、小川孫四郎氏からの聞き書きとしてまとめた当代の芝家具の思い出である（俵・中村・吉沼，1966，pp.157～158）。

震災前には芝といえば赤煉瓦通りが中心で堂々たる店舗を構えた商店が13軒も有り其等に陳列された商品は、舶来品あるいは舶来品を基準としたイミテーション（模造品）が大部分を占めていたのであった。そんなわけで、客筋も外人が多く、日本人の場合は例外無く一部の上流社会の人々に限られて居った。もっともその時代に見れば一般大衆と洋家具とは殆ど無関係で、富裕階級のみを対象とした。お店から勘定をもらえば、大抵内弟子を引連れて浅草の珍屋あたりに上がり込み一杯飲ませて労をねぎらう習慣が有ったのであるから、その世界での主従関係も極めて親密で修業はつらいが人情味豊かな人間性によって結ばれていた。

新橋は昔から人情味溢れる町として有名である。現在はその印象を持たない人も多くなったであろうがしかし、現在でも路地裏に密集した飲み屋街などからは、人の温かさが醸しだされている。仕事に厳しく、しかしその後はみんなで飲むというこの芝家具業の習慣は、現在の新橋の町の特色でもあると感じる。大企業が連なる新橋だが、それとともに路地裏の飲み屋街も繁盛しており、芝家具業時代の風景を思わせるところがあると感じた。

関東大震災と芝家具の転換

1923（大正12）年9月1日11時58分、関東大震災が起こった。第2章1節の新橋を中心とした港区の歴史のところでも述べたように、この震災による被害は芝地区が一番大きかった。

よって、当然のことながら芝家具も多大な被害を受け、これが芝家具の商況の転換期となった。一つ一つの店を見てみると、被害が大きかった店、小さかった店とそれぞれであるが、被害が小さかったからといってすぐに立ち直れたわけではないというところがおもしろい点である（俵・中村・吉沼，1966，pp.170～171）。

震災によって具体的にどのような変化があったかという点、まず第一にそれまで洋家具の重要な位置を占めてきた古道具商が激減したということである。芝家具は震災以前、洋家具を一早く取り入れていた横浜との連携で仕事を進めていた。しかし、震災によって横浜との行き来が困難になっている間に、新品を取り扱う方向に変化していった。また第二に、このような変化から横浜を始めとする地方の家具職人が東京に流入してきたことが挙げられる。家具の需要は芝が一番であったので、横浜へ下請発注して納品を待つて届けるというような方法は次第にとっていられなくなったのである。また第三は、それぞれの家具屋が自分の工場を持つようになったことである。今までは下請け注文を行い、その納入を待つという流れであったが、震災によって洋家具の爆発的な需要が起こったため、それを待つてはいられず、自分の店に工場を持つようになった（俵・中村・吉沼，1966，pp.177～180）。そして第四は、この流れを受け、今までの手工業から少し機械工業に近づいたということである。数台の木工機械をすえつけて、機械加工に依存する度合いを高める契機ともなった（俵・中村・吉沼，1966，pp.189）。

このように今までの横浜との連携が近い位置で行われるようになり、横浜の優秀な人材が芝に入ってきたことで、関東大震災を機に芝家具は更にその規模を拡大することができたといえるだろう。しかし、明治から大正期以後、すでに現在の赤煉瓦通り（新橋4丁目）辺りだけでは土地が足りなくなったということを前述したが、よって心配なのは、今回の横浜からの人口流入によって芝家具の範囲は更に広がり、拡散が始まってしまうのではないかということである。また、機械の導入によって、現代社会の特色ともなっている画一的な生産に芝家具業も近づいているのではないかという気もした。震災などの被害を受けた後というのは、被害を受ける前と同じということは必ずといっていいほどなく、被害はその商業の形態を少なからず変化させる。当たり前だが変化するごとに町は現在ある町に近づいており、社会の合理化画一化はこのような一人一人、一つ一つの店が変わることによって形成されるのだということを改めて感じた。

震災後の芝家具の率は、『最近東京市商工名鑑』によると7割にものぼる。一時的なものであった可能性もあるが、震災後すぐに新しい店を開業というわけにはいかないのだから、この数字は震災前の芝家具の反映を表すものであるともいえるだろう（俵・中村・吉沼，1966，pp.183）。

大正末・昭和初年の不況

前述した通り、関東大震災によって多くの家具職人が芝に集ってきて、製造も手から機械へと変わっていった。しかし大正末になると日本全体を大きな不況が襲い、芝でも職人は多くいるが仕事がない状態になってしまった。また機械への投資も痛手となった（俵・中村・吉沼，1966，pp.196）。芝家具のこのような変化を見ていると、芝家具発生当時は新橋の地に根付いた商売であったが、この頃になると規模が拡大し（土地の拡大という意味だけでなく商売の仕方なども含め）芝家具業が新橋という場所から巣立った商売になりつつあるというイメージを持つ。

不況に陥ったことから、家具屋は仕事の範囲を広くする方向に切り替え、ラジオのキャビネットやその頃流行ったタバコ屋スタイルの売り場にまで手を広げるようになった。しかし不況といってもそれは一般庶民の間でのことであり、上流の財閥クラスになると、家具が安くなっている今がチャンスと買い替えを行っていたという（俵・中村・吉沼，1966，pp.202～203）。

このような不況から脱却しようとする試みは、個々の努力であったようで、連結して何かを行うということにはなかったようである。しかし次第に洋家具が和家具を圧倒し、両者の区別がつかなくなる中で、家具業者の間に連帯感のようなものが生まれたという。またこの頃になると、芝地区以外にも家具の製造販売はかなり盛んになってきた（俵・中村・吉沼，1966，pp.226）。これは、自分の店に工場を持つという傾向から芝地区だけでは土地が足りなくなり、周りに広がっていったということが理由として考えられており（俵・中村・吉沼，1966，pp.235）。やはり先程述べたように、芝家具がその規模をどんどん拡大していったことが分かる。またこの頃もまだ、個々の努力によって不況から脱却しようとする姿勢が見られていることも注目すべき点である。商売規模の拡大とともに組織化が進むというのが現代社会の一般的な進み方であるが、芝家具は不況に陥ってもなお高級一品生産という誇りを持って仕事をしていたことが分かる。

不況脱却と太平洋戦争勃発による芝家具の画一化

芝家具の人々の記憶によると、景気の回復は事務用の家具から始まったそうだ。それも、既成の大会社・官庁というよりは、新しい時局に対応した会社・機関のためのものであったらしい。そしてその次に起こったのが、住宅用の洋家具の需要である。しかもこれは震災以前とは様態が異なり、新しい家財として要求された洋家具は、例えば目白、田園調布、荻窪、中野、成城学園などのいわゆる文化住宅の需要をみたくものであった。先程、不況期においても芝家具の高級一品生産の誇りを芝家具業者たちは持っていたのではないかと述べたが、文献によると、芝家具の当初の本質、金に糸目をつけぬ一品生産の高級注文洋家具製造には、この頃から変化が起きていると見なされており、水面下での動きを知った（俵・中村・吉沼，1966，pp.231～232）。

またその後の太平洋戦争により、芝家具は大きな被害を受けるとともに、その様態もま

た変化していった。この戦争により、洋家具は一般大衆化していくこととなったのである。その原因としては、焼かれた事務用家具の補充、アメリカ式生活への憧憬と浸透、産業規模の拡大や新産業の勃興、中流階級の増加などが考えられている（俵・中村・吉沼，1966，pp.233）。そしてこの景気の回復は、そのまま戦時下の好況へと続いていった。1937（昭和12）年頃の新橋・田村町辺りの芝家具集中度は依然として高かった（俵・中村・吉沼，1966，pp.246・253）。

しかしその後、厳しい統制経済体制下に入ると、自由な取引が全く認められなくなってしまった。『東京市商工名鑑』も、昭和14年度の実績をもとにした昭和16年刊の第8回を最後に姿を消した。名鑑から分かることは、名鑑全体の登載人員は増加しているにもかかわらず、芝家具に関する限りは業者数が大幅に減少しているということである。この理由としては、高級注文生産品という芝家具本来の性格が、画一・量産を旨とする戦争需要と相容れないものであったからではないだろうかと推測されている（俵・中村・吉沼，1966，pp.254・257）。

このように不況期に高級一品生産の芝家具に少しずつ変化が見られていたが、太平洋戦争によってそれが表面化したことが分かる。画一・量産に対応していく店と廃業する店、どちらを選択したとしても芝家具業者の心の中で葛藤があっただろうことがうかがえる。

芝家具の組織化

前述したように、震災前後までは芝家具にはきちんとした組合というものがなく、あったのは親睦的な家具装飾協和会をはじめとしたいくつかの団体であった。芝家具業者はそれぞれの独立意識が高かったのである。しかし戦争突入後はこの組合の形式が変化し、今までのような親睦的な団体から事業共同体へと変わった。そして芝家具業者は、好むと好まざるにかかわらず組合に入らないと仕事がもらえない状況となった。こうして、芝家具の組織化が進行していったのである（俵・中村・吉沼，1966，pp.261～262）。

また、不況から回復して昭和10年代に入るとまもなく、軍需品製造関係の会社工場からの注文が目立つようになってきた。大量の注文が続いたが、しかしそれも昭和12～14年頃の2年間ほどで、その後は厳しい経済統制下に入ることとなった。戦争では日常的な物資が不足したため、企業整備や配給統制のための合同・転廃業が起こった。徴用にとられ、戦災に遭い、むなしく家具業従事者としての実態を失ってゆく者と、軍需関係の仕事をやりながらとにかく事業としてはある程度儲けながら続けて行ける者とにわかれて行った。しかし続けていけたとしても、戦争による資材の統制によって、塗料から釘一本に始まって、板、角材はもちろん張り布に至るまで、規格にはまり配給を強制されたことにより、芝家具の本質の道からはそれることとなった。前述してきたように、芝家具はオーダーメイド、高級品を売りとしてきたのであるから、このような資材統制による商品の画一化は、芝家具の本質を覆すこととなった（俵・中村・吉沼，1966，pp.268～270）。

また、1944（昭和19）年のアメリカ軍B29による大空襲によって、芝は多大な

被害を受けた。芝家具中心地帯の主な戦災日は、まず3月9・10日に汐留町、新橋3・4丁目、田村町3・4・6丁目、愛宕町1・2丁目、西久保諸町ほか、4月15・16日に愛宕町1・3丁目、田村町2・3・4・5丁目、新橋2丁目ほか、そして5月24日未明に南佐久間町2丁目、汐留町、新橋3・5丁目、田村町2・5・6丁目ほか、5月25・26日に愛宕町、琴平町、田村町1・2丁目ほかとなっており、芝家具業者のほとんどが被災した。この結果、業務を停止せざるをえなくなった者やこれを機に芝家具業に幕を閉じる者が出ることとなった（俵・中村・吉沼，1966，pp.280～281）。

戦後の復興

太平洋戦争によって、芝家具は壊滅的な打撃を受けた。店を閉じる者も多かった中で、仕事を続けようと思意した者が探し出した仕事、それは新橋駅前に開かれていた闇市の中にあった。非配給物資、中古品、公定価格違反品を売買する闇市では、物を売るには地べたでも大丈夫であったが、食べ物屋だとそういうわけにもいかず、やはり椅子と食卓が必要であった。このような小さなきっかけを見つけて、残存業者は必死に仕事に取り組んだ。また、様々な企業が活動しはじめれば、当然事務家具も必要となってくる。戦争によって芝家具業者は激減したが、しかし生活と家具が切り離せないものであることから、芝家具業復興に燃える人々が出てきた（俵・中村・吉沼，1966，pp.285～286）。

また、ポツダム宣言受諾による日本の降伏によって、連合軍が日本の主要都市に進駐することとなった。日本は敗戦国の責任において、それらの進駐軍に必要な物資を調達しなければならないことから、当然洋家具界にも大きな受注の波が巻き起こった。しかしこれに対して、専門家である旧来の家具屋は、占領軍からの受注ということでしりごみしてしまい、確実にできそうな最小限の量しか引き受けようとしなかった。それとは反対にこの儲け話にのって来たのが、新たな企業家たちである。資材の用意までしてもらえ、お金もきちんともらえるという、この時代にあって珍しい儲け話に、新しい企業家たちは続々とこの業界に入ってきた（俵・中村・吉沼，1966，pp.287）。進駐軍の需要をこなした大業者は、芝全体でおおよそ15・6社、そのうち約3分の2は新興の業者で、残りの3分の1が戦前からの業者であったという。これら15・6社によって納入された製品の売り上げは、億単位のこともあったそうだ。また地理的にみても、この頃の芝家具街の中心地は従来の赤煉瓦通りではなくなっている。芝家具街の中心は、御成門から田村町（西新橋）1丁目に至る都電通り（日比谷通り）となり、ここに家具屋が集って、今までの赤煉瓦通りの伝統を奪っていった。この趨勢は戦前に始まっていたが、進駐家具がこの流れを一気に押し進めたと考えられている（俵・中村・吉沼，1966，pp.289～290）。

芝家具は高級家具ということもあり、このように進駐軍を中心として受注や修理が相次いだ。しかしそれがいつまでも続くはずはなく、業者が集りすぎたために競争が厳しくなったり、品質管理が厳しくなったりしたため、それに耐えられない業者が次第に出て来た。前述した15・6社の大企業も、そのうちの7割は危機に瀕し、3割がなんとか営業を続

けるといった状況になった。営業を続けることのできた3割のうちほとんどは戦前から芝家具をやっていた者であったことから、芝家具の伝統や経験の力の大きさが分かる（俵・中村・吉沼，1966，pp.291～292）。また、危機に瀕した7割の業者のうち2割は、その後1950（昭和25）年に起こった朝鮮戦争の特需で立ち直ることができた。しかしあとの5割は倒産、廃業した。ここで残った業者が、その後の生活様式洋風化、経済成長などの流れにのり、その後も家具業者として継続しえたという（俵・中村・吉沼，1966，pp.293～294）。

戦争中の厳しい統制下で画一化された芝家具業であったが、その後進駐軍の需要を経て生き残った業者を見ると戦争以前から商売をしていた者が多かったということから、戦後再び芝家具の特色が息を吹き返したことが分かる。現在の新橋には「伝統」という言葉があまり似つかわしくないようなイメージがあるが、都心の中においてもその土地や職業の「伝統」というものは根強い力を持つのだということが分かった。現在の新橋も一步路地裏に入ればそこは歴史を感じさせる空間であり、新橋という場所が今もなお伝統を持ち続けているのだということを感じた。

また、1947（昭和22）年には、「東京都中央地区家具商工業協同組合」が設立された。この組合は、日本橋、京橋、麻布、赤坂、品川、荏原の各区からも組合員を募ったもので、地方に散った芝家具業者も呼び戻してつくられたものである。これが芝家具業者たちの戦後初の顔合わせとなった。また、1950（昭和25）年には「東京都芝地区家具商工業協同組合」が誕生した。役員は中央地区組合とほぼ変わらず、これは港、中央、品川の三区域におよんだ同組合が事実上、芝の家具業者を中心にしていたことを表している（俵・中村・吉沼，1966，pp.299～303）。この組合は、家具に対する物品税の改正撤廃問題などに懸命に取り組み、芝家具業者の税金対策は全国でも有数のものとして知られている（俵・中村・吉沼，1966，pp.321～322）。また、芝家具商工業協同組合は、企画委員会を開いて家具設計講習会の開催を計画したりもした（俵・中村・吉沼，1966，pp.359）。戦前も最後のほうは学校出身者を取り入れるようになっていたが、戦後はこの傾向が一気に強まったといえる。その証拠として、戦前もこのような組合はあったが、家具設計講習会のような企画は開催されていなかった。戦前は、文字が読めなくても仕事ができればよい、といった考え方が主であったが、戦後は新たな考え方が生まれたのである。技術とともに、それを補強する理論・感覚・設計法を身につけることの重要性が重視され始めた。またこの組合におけるもう一つの注目点は、戦争中につくられた「組織的」な組合ではなく、戦前にあった「親睦的」な組合に、この組織の性格が戻っているということである。ここでも伝統の根強い力と、家具業を行う個々の力の大きさ、誇りを感じた。

ちなみに芝の地域が、重要木工集団地として通商産業大臣の指定を受けたのは、1949（昭和24）年2月のことである（俵・中村・吉沼，1966，pp.351）。

さてここまで芝家具業の変遷を追ってきたところで、次に芝家具業の人々の暮らしを見ていきたいと思う。誠に残念ながらこれ以降の芝家具業の情報は入手することができなかつたため、この仕事に携わった人々の暮らしを追うとともに、現在の芝家具の状況を見て、

都心における地場産業について多角的に考えていきたいと思う。

4 - 3 芝家具業の人々の暮らし

芝家具業の職人の気風は、大方の職人は金を問題にしなく、他人よりよい仕事をしたい一心である、といった感じだったそうだ。休業中は冬でも半股引一つ、仕事中はよそ見をしたり話をするなどということにはなかった。その代り親方は人情味があって、休む時には飲み屋へ一緒に出かけ、時には全員を女郎買いに連れて行くというふうであったらしい（俵・中村・吉沼，1966，pp.120）。

一方、作る側でなく売る側は、このような職人徒弟とは違った様相を見せていたそうだ。作る側にある人情的な繋がりは希薄だったようで、また職人達のような仕事に対する厳しさも少なかったらしい（俵・中村・吉沼，1966，pp.121）。

当時の芝家具業者の豊かな暮らしぶりを表す言葉として、「べらぼうめ、金がなくなりゃ働くかぁ」という言葉があり、印象的である。応接セットを一組売れば、半月は楽にくえるという状態だったことからこのような言葉が生まれたのだろう（俵・中村・吉沼，1966，pp.122）。また、関東大震災前の大正初期頃は、芝家具業の人々は、烏森の花街の最もよいお得意としてドンチャン騒ぎを繰り返し、すごい時は3日も居続けるような人たちもいたり、日本に3台しかないという輸入自動車を購入して乗り回したという話も残っている。ちなみにこのようなことは庶民の私生活とは縁遠かったために、世間一般に広くは知られていなかったそうだ（俵・中村・吉沼，1966，pp.163）。

このように高級一品製品の芝家具業らしく、その職人たちも豊かな生活、厳しい仕事ぶりだったことがうかがえる。庶民の私生活とは縁遠かったことから、このような生活が新橋という場所の象徴であるとはいえないかもしれないがしかし、このような芝家具業者たちの生活が新橋という町を築く一部分であったことは事実である。地場産業でありながらも庶民の私生活とは縁遠いという点に、都心という役割を担った新橋らしさを感じることができる。

次に何人かの芝家具職人の生活ぶりを追い、芝家具業の動きを一番小さな単位から分析していきたいと思う。

中野洋家具店～赤煉瓦通りの草分け商店～

中野洋家具店は古物商として出発した家具商である。煉瓦通りの古物商の草分けとして1876（明治9）年に創業した。その後同業者としては、尾張屋商店、玉置商店、大口屋野依商店、小沢仙之助商店、原幸商店、大野屋岩本商店、原岩商店、大国屋等があった。いずれも、中古品の欧風家具、室内装飾品（外国大使館員の家具類など）を競売によって

買い、それを修理しあるいはその物と同じ品を模造して店頭に飾り、古物商として営業していた。これらの品々を取り扱った商店が赤煉瓦通りに最も多く、赤煉瓦通りは一流品を並べていた（俵・中村・吉沼，1966，pp.423～424）。

中野松太郎氏により1876（明治9）年に開業された中野洋家具店は、彼の死後長男である松次郎が店を継ぎ、その後は松次郎の長男である一郎が店を継いだ。古物商は、修理や復元をし、新品同様にして椅子テーブルの類を商品化すれば、時によっては10倍ほどの利潤を得ることができたという。松次郎の妻であった千代夫人は、家具商のことを以下のように語っている（俵・中村・吉沼，1966，pp.424～425）。

家具屋というものは十分儲けることもできましたが、その割に2代、3代と続かないのは、はいただけ派手に遊んでしまったからでしょう、今はそんなことはありますまいが、当時の家具屋の主人で人格者という人は、めったにありませんでした。

この2代目主人中野松次郎氏夫人である千代さんは、とても商売熱心な方だったそうだ。関東大震災後も直ちに復興に取り掛かり、赤煉瓦通りで1番最初にバラックを建て、職人を呼び寄せ、復興に取り組んだという。また、震災による火災の中で、初代中野松太郎の肖像画を必死で守り抜いたという話も残っている（俵・中村・吉沼，1966，pp.426～427）。

彼女が芝家具が長く引き継がれない理由として、「派手に遊んでしまった」と言っている点が印象深い。確かに今までの芝家具の変遷を見てきても、仕事と休憩との間に生活のギャップが感じられる。新橋は多くのお金がめぐりめぐる場所であるということが分かった。

中野洋家具店は戦後、古物商から新品を扱う店へと路線を変更した。これは、古物商というのは、代物を購入した先と売却した客との名簿を明瞭にしておくことが肝要で、これを怠ると面倒なことが起こるらしく、その記帳が面倒だったために戦後路線変更をしたということである（俵・中村・吉沼，1966，pp.428）。

中野洋家具店のその後の動きは明らかではないが、現在はこの家具屋を赤煉瓦通りに見ることはできない。

鳥羽商店～家具業初のビル店舗での商売～

鳥羽商店は、1891、92（明治24、5）年に石川県出身の鳥羽和太郎によって始められた。和太郎氏は上京後、家具職人修業をしながら腕を磨いた。2代目は、初代和太郎の従兄弟にあたる鳥羽重男である。鳥羽商店は、家具業初のビル店舗を築いたことで注目すべき店である（俵・中村・吉沼，1966，pp.441～443）。

鳥羽ビルは1928（昭和2）年、芝田村町1丁目交差点の角に建設された。きちんとした資金もなかったため、復興助成金融株式会社からの高利の資本を借入れて、建築費12万何千円をかけて建築されたそうだ。しかし、当時襲った不景気と不況に見舞われて金利はかさみ、一時は破産の宣告さえ受けながらも、なんとかがんばり通したという。ビル

における家具商の商い方についてだが、鳥羽商店はビルの全階とも陳列場とし、工場自家製品の販売（品種だけで150種以上）を売りとして、当時としては立派なカタログまで作成配布し、商売をしていたそうだ（俵・中村・吉沼，1966，pp.441・447）。しかし結局この鳥羽ビルは、終戦直後に売却された（俵・中村・吉沼，1966，pp.449）。

鳥羽商店が家具業として初めてビル店舗を築き、カタログなども作って商売を行ったことは、芝家具業の販売戦略における視野を広げた。一般的にみても、地場産業をビル内で行うということは珍しいように思う。常に都心化の真っ只中に在る新橋という場所だからこその動きなのではないだろうかと考える。伝統を受け継ぎつつも新たな事に挑戦することのような姿勢に、芝家具業が常に時代の流れに乗った産業であることを感じた。

2代目である鳥羽重男氏には和一氏という息子がおり、彼が鳥羽商店の3代目となった。彼は明治大学商科を卒業後、家具界に身を置いたが、在学中から映画に興味を持っており、終戦と同時にPR映画製作をやり始め、結局鳥羽商店を継がなかった（俵・中村・吉沼，1966，pp.449）。

野沢工業所～芝生まれの芝家具商～

野沢工業所は、芝愛宕町1丁目8番地で、1921（大正10）年10月に開業した。野沢工業所の創始者は野沢仙太郎といい、彼は芝生まれの芝家具商であった。芝生まれの芝家具商というのは、彼が初めてである。芝家具同業街で商売を営む人々のほとんどは、芝以外の地で育ち、のちに芝で家具商を営んだ。芝の家具街で育った人の中から、芝家具を営む者が出てきたということは、芝家具の歴史の重さを表しているだろう。野沢仙太郎氏が生まれた1900（明治33）年には、表通りの店舗や裏通りの工場の集中で芝家具街がはっきりと成立していた。野沢仙太郎氏は次のように語っている（俵・中村・吉沼，1966，pp.557～558）。

私は芝愛宕町で生まれ、表通りは洋家具店軒をならべ、裏通りは指物工場が群をなしている中で育てられた環境から自然と将来家具で立つ心構えができました。

また、野沢工業所のもう一つの特徴として挙げられるのは、既製品の取り扱いを始めたということである。芝家具が高級品であり、大衆から縁遠いものであると感じていた野沢氏は、誰でも手の届く家具を、と考えたのであった。前述してきた通り、芝家具に既製品はほとんど無かったため、これは珍しい試みであった。野沢氏はまず、若者が洋風家具に馴染みやすいだろうと判断し、学生向けの洋風家具を狙った。同業者からは嘲笑されることもあったが、滑りだしは好調であったそうだ。しかし好調なまま2年が過ぎた頃、関東大震災にみまわれ、工場・住宅ともに失ってしまった。建て直しの見通しもたたず野沢氏は苦しんだがしかし、立ち直りが早く、9月下旬には仕事を再開していた。そしてその後はデパート向洋家具にも進出し、多数の注文を受けるようになった。しかし、次第に多量

の注文をさばききれなくなり、最終的には未納の非難を被るほどであったという。それでも製造規模を拡大し続けていた最中に、今度は昭和初期の金融恐慌を迎えてしまった。それとともに不景気もやってきて、以前とはうってかわって今度は日ごとにストックが増大してしまった。それでも野沢氏はなんとか工夫を凝らし、この状態から抜け出し、その後も様々な知恵をしぼって活路を見出していった（俵・中村・吉沼，1966，pp.558～563）。

野沢氏が芝家具に既成品をもたらそうと考えついたことは、芝で生まれ育った人ならではの発想であるといえるだろう。芝家具が一般庶民と縁遠いものであったことは今までも何度か述べてきた。新橋における一般庶民の生活の中で育ったからこそ、芝家具に新しい方向性を見出すことができたのだと考える。また、野沢氏は様々な苦難を新しい独自のアイデアで乗り越えてきたことから、非常に頭の柔らかい人であったことがうかがえる。芝家具は同じ境遇の人が集る業種ではなく、様々な人が集ったことがその産業の視野を大きく広げたといえるだろう。

その後太平洋戦争によって工場は閉鎖し、自分の後継者としていた次男も1946（昭和21）年に失った。そして、自身も健康を害していた野沢仙太郎氏は、廃業の決意を余儀なくされた（俵・中村・吉沼，1966，pp.564）。

K商店～元芝家具商から直接うかがったお話～

家具屋としてこの地に残っている人はとても少ない。そんな中で昔、東新橋2丁目で家具屋を営んでおり、もうすでに店はたたんでいるが、現在も昔からの家に住んでいらっしゃるTK氏にお話をうかがうことができた。

まず芝家具は、「がっちりしっかりできている」ということで有名だったそうだ。この辺りは一つ一つが一軒家で、定住している人がとても多かった。しかし1986（昭和61）年頃、ちょうどバブルが始まる少し前くらいからだんだんと個人商売が成り立たなくなっていく。土地が値上がりし、買収されて住めなくなってしまうたり、後継ぎがいなくなってしまうためである。跡を継ぐのではなくサラリーマンになる人が増え、老人だけが残されるようになった。サラリーマンになる人が増えたのは、時代の流れである。この家の前に建っている家（TH氏宅 次の段落で紹介）は、1986（昭和61）年に家具屋を辞めた。私の家も1994（平成6）年に家具屋の看板を降ろした（TK氏ヒアリング，2003）。

また、このTK氏宅の前にある家で家具屋を営んでいたTH氏は次のように語った。

この辺りは愛宕下と呼ばれ、家具屋で有名な場所であった。またその他にも、この辺りは自営業が多く、今のようなテナントはなかった。自営業には、電気屋、自転車屋、工具屋、床屋、木箱屋、コーヒー屋、酒屋など色々あった。

なぜ家具屋がこの地を集ったのかは亡くなった夫に聞かないと分からない。うちはとても広い敷地にあり、夫は職人としての腕がすごく良くて、この辺りでは親方と呼ばれていた。トラックもテレビもうちが一番早かった。しかし次第に、工場がないと家具屋ができ

なくなっていき、家具屋が少なくなっていっていった。夫が中学3年くらいの時に、この家は家具屋で一度倒産した。この頃うちはデパートに家具を入れていて、Yさん(5丁目)の下請けをやっていた。しかしYさんが倒産してしまい、連鎖的にうちも倒産してしまった。水も電気も止められてしまい、生きていくことができなくなるほどの状況に陥った。倒産しても何もお金は払われないしやはり民間ではダメだということで、終戦後に国鉄をやりだした。終戦後はみんな軍服を着て南京袋を持って仕事をしたものだ(以上、TH氏ヒアリング, 2003)。

このヒアリングで印象的だったのは、トラックの購入もテレビの購入も家具屋であるTH氏宅が一番早かった、ということである。ここにもやはり家具屋の贅沢さを見ることができる。TK氏宅は細長い4階建ての家で、少し前までは1階にトラックが置いてあり、ほぼ昔の作業場のままの状態であった。しかし私がヒアリングに行った後、高齢になったため階段の上り下りが辛いため4階にあったお風呂場を1階に移動させる工事が始まり、作業場はついに無くなった。

4 - 4 芝家具の現状と都心における地場産業の特徴

現在赤煉瓦通りには、芝家具店は一店もない。戦後芝家具業の中心街が赤煉瓦通りから一本向こうの大通りである日比谷通りに移ったということを先程述べたが、現在は日比谷通りも大小のビルで埋め尽くされており、芝家具店は見当たらない。戦後芝家具業が復興して以後芝家具業がどのような動きをみせたのかは、残念ながら資料を入手することができず、また赤煉瓦通りの芝家具商の方々にもお会いすることはできなかった。しかし家具業に携わった人に関わらず様々な自営業者にヒアリング調査を行ってうかがった話から、だいたいの状況を推測することは可能である。

ヒアリングを行った人のほとんどがおっしゃったのは、高度経済成長期に入ってから、その仕事の種類に関わらず、土地の値上がりなどを主な理由として、店をたたみ引っ越す人が多くなった、ということである。新橋赤レンガ通り発展会副会長のW氏にお話をうかがった際も、「現在赤煉瓦通りは、その場所をテナントに貸したほうが儲かる時代となった」とおっしゃっていた(W氏ヒアリング, 2003)。

また、本章の3節で芝家具業の人々の暮らしについて記した。これを読むと、芝家具業が現在まで続かなかつた要因として、その商売を家族や親族の中だけで運営していこうとする傾向が強いためであるということが分かる。息子が継がなかったため廃業という店が目立ち、家族親族以外の人がある店を継ぐことは稀である。芝家具業の人々は人情味溢れることで有名であるが、店の引継ぎに関しては家族親族のラインを超えることはなく、その他の弟子達は独立して自分の店を新たに開業したのだということが分かる。このような

傾向と時代の流れが絡み合い、高度経済成長期辺りから次第に芝家具を衰退させていったのだらうと推測することができる。

さてここで、芝家具の特色を整理したいと思う。芝家具は芝という地域に密集した業種である。家具販売業者・家具製造業者とその従業者、関連業種が芝に多数集中しており、その極端な自閉性、近隣地域内での完結度の高いことは、他の地域、他の業種にはみられない特質であると考えられている（依・中村・吉沼，1966，pp.353）。なぜ、このようなことになったかについては様々な原因が挙げられており、それらが関連しあっていると考えられている。

一つ目の理由としては、前述したように芝家具が工場制工場ではなく、手工業であったことが挙げられる。もし、芝家具が工場制工場であったとしたら、このように地域に密集する形にはならなかったであろう。また、芝家具は家具業の中でも特に高級品を扱っており、一品生産であったことから、工場という形が成り立たなかったともいえる。そしてまた、家具を作るためには様々な材料と技術が必要であるということも、事業所が一地域に集中した理由となるだろう。一品生産品である芝家具の様々な材料は、それぞれ熟練した職人たちの腕によって作られるが、そのような職人を全て自分の工場に置くことは当然のことながら難しい。また、その仕事の単位量は比較的小さいので、輸送経費が過大にかかってしまうような場所で仕事をしていてもマイナスになってしまう。このように、家具という業種、そして芝家具という高級一品製品であったことが、芝家具を一つの地域に集中させた理由として挙げられるだろうと考えられている（依・中村・吉沼，1966，pp.353～354）。

ではなぜその芝家具集団地が芝（新橋含む）地域に発生したのか。まず第一に、前述したように、洋家具の需要が芝付近に起こったことが挙げられる。第二に、小事業所の集中的存在を受け入れるだけの敷地＝大名屋敷の跡地が芝にあったことが理由として考えられている。また、これが戦後まで続いた理由としては、工場制生産に踏み切るには芝という地域が適していなかったことから、高級一品生産という概念をいつまでも捨てられなかったことが理由として挙げられる（依・中村・吉沼，1966，pp.353～354）。今まで新橋の歴史や芝家具の変遷を見てきて、新橋という場所の特色として「保守的である」ということが挙げられると考える。これは都心という性質上、どちらかというところに住む人々が町を創る力よりも、行政や国、時代の流れがこの町を創る力のほうが大きいということを示しているのだろうか。

都心における芝家具という地場産業の特色については、やはりその先進性が挙げられるであろう。鉄道開設による他地域との繋がり、海外との繋がり、また西洋化の先駆者である、このような場所の特徴が芝家具を生み出したのであると考える。都心における地場産業であるからこそ、その衰退も著しく、現在では全くといっていいほどその面影を見ることはできなくなっている。都心にとって、大きく言えば日本にとって必要なものが新橋の地場産業になるのではないかと考える。それが当時であれば、西洋化が押し進められておりビル化が進んだため、またその他にも太平洋戦争後の進駐軍の日本進出によるためなど

の理由から、洋家具である芝家具という産業が新橋に根付いたのではないだろうか。そして現在の日本、都心に求められるものはグローバルな産業であるため、第1章のデータからも分かるように情報産業が盛んになっているのではないだろうか。情報産業はその土地の地場産業とは捉えられにくいだが、このような芝家具の変遷をみていると、現在都心に求められている情報産業こそ新橋の地場産業であるともいうことができると思う。よって、新橋の地場産業は時代の流れとともに移りかわるものであり、時代を象徴するものであると推測することができる。

芝家具商は、一人一人の持つ個性や誇りがとても魅力的である。現在の新橋は、人々の間にあまり関わりがないと思われがちだが、これはよく言えば一人一人が自分の考えを持ち独立しているともいえるのではないだろうか。このようなマイペースな気質が、新橋の町を大きく発展させる可能性を秘めていると考える。

第5章 都心における大規模開発

5 - 1 住民主体ではない新しい町の誕生～汐留再開発～

汐留地区といえば、更地というイメージが私にはある。再開発が始まる少し前まで、汐留地区では遺跡発掘が進められており、その間ずっと土地の上には何も無い状態であった。しかし近年再開発が開始され、大きなビルが次々と立ち並び、この町の表情は現在大きく変わりつつある。今年の夏休みには、日本テレビのイベント開催もあってか、汐留には多くの観光客が訪れ、町は賑わった。次々に入るテナントを見ながら、新しい町が生まれようとしていることを感じた。

汐留再開発の概要

汐留地区の面積は約30.9ha（東京ドーム7個分）で、1872（明治5）年の新橋 横浜間の鉄道開通以来、この地区は鉄道の要衝として位置付けられてきた。その後、貨物輸送の拠点となってきたが、1986（昭和61）年11月に汐留貨物駅が廃止され、1997（平成9）年旧国鉄清算事業団からの売却を経て、現在は東京都による土地区画整理事業と各地区ごとの再開発計画により建築工事が進められ、2006（平成18）年の完成を目指し開発が進んでいる。当地区は、北に銀座、東に浜離宮庭園、南に浜松町、芝離宮庭園、西に新橋地区が位置し、海側に首都高速1号線、地区の南北にJR線、第一京浜が通り、まちづくりの拠点として重要な位置を占めている。汐留には、日本テレビや電通など多くの大企業本社ビルが並び、ホテル・劇場や3棟の高層マンションなど合計15棟の高層ビルをはじめ、多くのオフィスや商業施設が建設される予定である（港区，2002年12月，pp.36）。また、イタリアの風景を真似たイタリア街「Citta Italia」も造られる予定となっており、新橋周辺の環境を大きく変える力を持つ町の誕生となる（図表5-1）。

また、汐留には現在、「ゆりかもめ」という新交通が通っている。これによって、お台場や有明など海を越えた地域とも繋がりを持つこととなった。

このように近年大きく変化している汐留地区であるが、この開発を見ていると、人々が町を創っているというイメージが全く湧かない。東京都による開発進行であるし、この土地に入ってくるのは企業やテナントばかりである。確かにまだマンションが完成していないため、人のいない町というイメージを受けるのかもしれない。しかし、マンションの完成とともに人が入ってくるとしても、町を創ったのは他の人であり、その点にとても違和感を感じる。あらかじめ造られた町に、最後に人が移ってくる。このようにしてできる町もあるのだと知り、人間の匂いの無さに一種の気持ち悪さを感じながらも、思い返してみると人間くさくない（生活感のない）町が近年ここ一帯の主流となっており、それを表す

少し大きめのシンボルがこの汐留地区なのかもしれないと思った。

汐留再開発による従来の新橋の変化

この汐留地区には商店街や一軒家が造られる予定は無く、外部の人にとっては観光地色や大企業色を強く感じる場所となるであろう。汐留の住所は「東新橋」であるので、もちろんこの地域は新橋の一部である。このように、一般的な静かに住民が定住する町ではなく、アミューズメントパークのような町が誕生することは、新橋の町に多大な影響を与える。また、汐留地区は銀座ともとても近い位置関係にあるため、銀座に遊びに来た人が汐留に寄るという新たな観光ルートも考えられ、新橋の地により多くの人々がやって来ることになるだろう。人の流れが変化することは、町にとって重要な意味を持つ。汐留再開発について、近隣の住民はどのような考えを持っているのかをヒアリング調査した。

汐留地区と道路を隔てて隣接した所に住むTK氏は、汐留再開発の会議などにも参加している。また地元の友達の中にも、汐留再開発によって他の土地に引っ越していった人もいたことから、汐留が再開発されることについて町内でのいざこざなどが無かったかどうかをうかがった。これに対するTK氏の答えは、特にいざこざはなかった、というものであった。ただ、再開発地に馬券売り場を誘致することには反対したそうだ。TK氏は、博打で人を呼んでもそれは本当の町の活性化には繋がらないと考えている。しかし、町の活性化のために馬券売り場誘致に賛成する人が多かったため、結果的には誘致することとなった(TK氏ヒアリング, 2003)。同じく汐留地区と道路を隔てて隣接した所に住むM氏も、馬券売り場の誘致に関しては反対した人の一人だ。町の雰囲気が悪くなると思って反対したそうだ。しかし結局、汐留の小さな土地でこまごま営業しても利益は上がらないので、大きなビルを建てようとなった時に一番潰れない会社ということでJRAに賛成が集ってしまった。そのかわり町の清掃を条件としたので、今は多くの清掃員が町にいて、町がきれいになったと思う(M氏ヒアリング, 2003)。町の清掃については、私も毎日新橋の町を歩いているので、近頃町がきれいであると感じる。多すぎるほどの清掃員が新橋におり、ゴミ拾いなどはほぼ完璧とあっていいだろう。また、馬券売り場ができたことによって、町にいる人のタイプに幅ができたと感じる。明らかに馬券を買いに来たという人は、一目見てすぐ分かる。町に新しい施設や企業などが建設されるということは、新しい層の人々をこの地を集めるということになるのだということを実感した。

M氏は、汐留再開発自体については、町の雰囲気が変わり良いのではないかと賛成の意を示している。電通など大手企業の本社が集れば、関連企業も集ってきて、町が活気づくだろうと考えている(M氏ヒアリング, 2003)。また、汐留地区とは第一京浜を挟んでいる日蔭町のA屋さんは、汐留は貨物駅が無くなってから放置しておくのはもったいないので、開発しないよりはしたほうがよいと思う、と語った。ただ、この店(履物屋)は汐留とは第一京浜を挟んでいるのであまり関係ない、という気持ちがあるそうで、大規模開発への関心の薄さを示した(A屋ヒアリング, 2003)。

また、もともと汐留の土地に住んでいた人についてだが、その人々は基本的に自分の好きな土地に移動することができたという。しかしこの辺りにビルを持っている人は借金をしてビルを建てた人が多いため、この場所をテナントに貸したほうが利益増になるといって、これを機に住まいを引っ越す人が多かったそうだと(M氏ヒアリング, 2003)。

このように、汐留再開発によって従来この地に住んでいた人々は立ち退いていった。その代わりに、馬券売り場を利用する人々、日本テレビを訪れる人々など、新たな層の人々が集ってくることとなった。これらの変化は、国によって押し進められた事業による結果であって、もともとこの地に住む住民はその変化に自分の生活を合わせていくしかない。都心である新橋において、住民主導のまちづくりはとても困難であることを思い知らされた。

5 - 2 新橋の町が分断される～幻のマッカーサー道路～

汐留開発によって、幻の道路「マッカーサー道路(環状2号線)」が半世紀の時を越えて蘇った。マッカーサー道路とは、太平洋戦争後すぐに、アメリカが虎ノ門にあるアメリカ大使館と東京湾を結ぶ軍用道路を要求したことがきっかけで計画された。これがマッカーサー元帥にちなみ、マッカーサー道路と名付けられたのである。しかしこの道路はその後約半世紀の間、計画上のこととして眠っていた。しかし、1980年代に汐留再開発が計画されたことにより、虎ノ門と汐留を結ぶ環状2号線計画が再び脚光を浴びることとなった(『ガイアの夜明け』より)(図表5-2)。

環状2号線の概要

汐留再開発によって蘇った環状2号線は、2002(平成14)年10月に事業計画が決定した。この環状2号線は、虎ノ門と汐留を結び、更にお台場、有明、湾岸のほうへ伸びていく大きな道路であり、第一京浜とはほぼ垂直に交差する形となる。また虎ノ門 汐留間には、青年館街区、虎ノ門街区、新橋街区の三つの街区が設定されており、それぞれにビル(商業+住宅)が建つこととなっている。住民の約3割が入居を希望しているが、最終的にはこれより少し減るとみられている(「環2地区事業説明会」,2003)(図表5-3)。

環状2号線は全長350m。外堀通りから桜田通りまでは普通の通りで、その他は地下を通す造りとなっている。地下道路には、土壌浄化システムと開口部を取り入れ、これらを用いることによって、自動車の排気ガスの絶対値を下げるのが可能となる。土壌浄化システムは、地下の車道の上に約1mの高さで設置する予定で、歩道は片側約5.5m、車道は5mとなっている(「環2地区事業説明会」, 2003)。

「入居を希望している人が約3割しかない」ということについて、東京都建設局再開

発事務所環二地区長のM氏に詳しいお話をうかがったところ、飲み屋を例に挙げて話して下さった。新橋には10坪くらいの小さな居酒屋が多いが、これらが商業ビルに入ることになると、家賃として1ヶ月20万ほどを払わなければいけないという。これは居酒屋にとってとても苦しいことである。またビル業者の視点から見ても、新しいビルの中に小さい居酒屋を細々造るわけにいかない。よって結局は他の土地に移ってしまう人が多いそうだ(M氏ヒアリング, 2003)。

開発というと一般的にはその町のためにされるものがほとんどだが、今回の場合は新橋という町のためというよりは、この場所が都心という機能を担っているために行われている開発だということが分かる。この道路の建設は新橋の町に何ら寄与しない。それでも新橋の町は道路を受け入れなければいけないのである。このような行政主体の開発(もちろん形式的には住民の意見も取り入れているが)は、従来からの住民をこの町から追い出し、その他にも多くの問題をこの町に持ってくる。具体的な問題点を挙げながら、このような大規模開発の中でいかに地元住民がこの町の個性を表現していけるのか考えていきたいと思う。

都心における開発の特色と問題点

今回の道路計画の重要な論点の一つとなっているのが、環状2号線の土壌浄化システムについてと、それによる町の分断についてである。土壌浄化システムは幅が40mあり、高さが70cmほどあるため、そこに歩道を造ることが難しく、環状2号線ができてしまうとそこに今まであったような細かい歩道を交差させることが不可能になってしまう。つまりこの環状2号線の設置によって、町が北と南に分断されてしまうのである。そのため人の流れが変わり、商店街にお客さんが来なくなってしまう。また、田村町会(西新橋)には開口部が設置されるため、排気ガスの問題に直面し、この道路のせいで過去150あった所帯が30所帯にまで減ってしまったという。しかしこれに対しては行政は、土壌浄化システムを設置しているのだから、排出される排気ガスは環境基準値を超えないと主張している(「環2地区事業説明会」, 2003)。

二つ目の問題点は、この道路設置によって半強制的に、町の形態が変わる=人々の生活が変わる、ということである。再開発地区では、現在平屋のものが集合住宅になることがある。その場合特に高齢者で、今までの畳生活からマンション生活に変わることには抵抗感を持つ人が、アレルギーになってしまうという。新橋には70歳くらいで居酒屋を営んでいる人もいる。しかしそういう人は、新しいビルに入ってまで商売を続けたくないと言うので、そうなるつまりは今までやってきたことを自ら変えるしかない。また、もし新しいビルで仕事を続けることを選択したとしても、ビル内共通の営業ルールが作られるため、今までのように自分の店独自の規則を用いて仕事をすることはできない。よって、最終的にはそれぞれが多かれ少なかれ生活形態を変えることになるのである(M氏ヒアリング, 2003)。

次に三つ目の問題点は、今回の計画が道路だけという細い区域取りのため町ごとと変えることができない、ということである。例えば前述した汐留地区のように区画整理という形で面での開発をすれば、住宅や商業の配置をバランスよくすることができる。しかし現在行政には約1300億円もの赤字があり、これからはお金のことも考えながら再開発をしなければいけない時代になった。そのため今回の環状2号線計画は、道路だけ造ってその他のことは地元任せるといって、一番スリムな形となっている（M氏ヒアリング，2003）。

以上のような問題点から明らかなことは、この道路が地元になんといいほど寄与しないということである。それどころか、この道路は住民に多大な迷惑を与えている。しかも今回の場合、道路だけを造り、後は地元任せるといって形をとっており、これは新橋の町にとってはなかなか難題ではないだろうかと思う。新橋の住民は保守的で人任せなところがあり、また地域コミュニティも薄い。このような特色を持つ町の中に道路だけが造られるということは、行政が町のためを思っているというよりは、本当に自分達のやらなければならない仕事を最小限に抑えて進めていると捉えたほうが無難であろう。新橋は時として、その町自身のことよりも都心としての役割を果たすほうに重点を置かざるをえない状況になることがあるのだということを理解しておかなければいけない。

また今後新橋に定住する人の層については、職住隣接パターンの若い一人暮らしの人や独身夫婦、老夫婦人が多いと考えられている。大企業がこの地にやってくるため、人々のニーズも高いと推測する。しかし、家族が越してくる可能性は低いという（M氏ヒアリング，2003）。家族の少ない町というのは、新しい町の形である。もし仮にM氏の推測が当たるとすれば、家族を抜かした人々間でのコミュニティ形成は非常に難しいことのように思える。しかしこれが時代の流れだとすると、これは避けては通れないことである。今までの新橋の町づくりの変遷を思い返してみると、今後はどの町でも次第に新しい地域コミュニティ形成が求められるような時代が訪れ、現在その先駆けとして動いていくことを求められているのが都心である新橋なのかもしれないと考える。

行政が考える都心のまちづくりと新橋の雰囲気

町は変化していくものであるから、もとあった良さを残すのは難しい、だからこそ良さを新しく創っていかねばいけない、とM氏は考える。環状2号線の第一の使命は、都心において汐留から有明、そして湾岸へと続く道路を造ることであり、これは都市の再生に寄与するものであるという。しかし今回の環状2号線は、前述したように汐留地区のように面で再開発しているわけではないので、必ずしも地元寄与しない。だから逆にいうと、平面として残った部分の今後の開発が地元寄与することになるだろうと松村氏は考える。環状2号線が良いものならば、必ずそれが地元にも生きてくると松村氏は考えており、魅力的ではあるが町としてこれ以上発展する可能性の薄い新橋の路地裏を住民たちで変えてほしいという。また、新橋の町にビルばかりが建つことに関しては、M氏は「空と平地とのバランスが大事だと考えている」とおっしゃった。つまり、

空に伸びる部分と下に広がる部分とを場所によって分けていかなければ、新橋の文化である路地文化も残していくことができないということである。新橋は都心なので、使い勝手の良いものがあれば民間同士（民間資本）でうまくやっていくことが可能な町であるという（M氏ヒアリング，2003）。

このお話からも分かるように、新橋は今後、自分たちで発展していくことを求められている。道路設置後が新橋の町にとっては勝負なのだと感じる。しかし、この道路設置によって多くの方がこの土地を離れてしまう。そんな中での民間同士の開発が困難をようするであろうことは容易に想像できる。また今回の道路計画が、新橋のまちづくりを重視したものではなく、新橋の都心としての機能を重視したものだということも明らかである。都心におけるまちづくりの場合、その計画にはある種避けられない強制的な部分が備わっている。よって、都心である新橋に住む人々は、行政が持ちかけたその開発をいかに上手に利用するかということが大切になってくるのではないだろうか考える。

新橋の人は皆紳士であり、だんな衆であるとM氏は語る。地元まわりをした時に驚いたのは、権利者が皆名刺を持っているということである。このようなことは他の地区ではありえないという。また自営業者が多く、サラリーマンがあまりいないという印象も持ったそうだ。また、新橋の人は皆さっぱりとした気風でちゃきちゃきしているという印象も持っているという。M氏はこのような新橋の気風は、商売をやっていることと関係していると推測する。例えば土地買収の件に関しても、それぞれが自分のものさしを持っているとM氏は感じている（M氏ヒアリング，2003）。

「自分のものさしを持つ」ということが新橋の商売人の特色なのであろうか。M氏のお話をうかがっていて、芝家具業の人々の気質と現在の新橋商人の気質に似たところがあるということに気付いた。しかしこれは逆にいえば、地域としてのまとまりがないとも捉えられる。あっさりこの町を離れる人もいるそうで、人々の間で町への愛着に幅があることがうかがえる。また、新橋にはサラリーマンと自営業者が混在しており、両者間で気風も異なる。このような両者の特徴をうまく組み合わせることが、新橋の町を創っていくうえで大切なのではないだろうか考える。例えば赤煉瓦通りで2代に渡って続いている有名な和菓子店「S堂」では、サラリーマンがお詫びの際にもっていく「切腹最中」が大ヒットしている。発売前は家族の中から「縁起が悪い」という声もあったが、その斬新な発想とサラリーマンの立場を的確に捉えたネーミングがこの町に適合したといえるだろう。

環状2号線をシャンゼリゼ通りに

この「切腹最中」を生み出した張本人であり、環状2号線新橋街区副部長・新橋赤レンガ通り発展会副会長でもあるW氏にお話をうかがった。W氏の家は前述したように、2代続いている新橋でも有名な和菓子屋であり、現在19歳になる長男が店を継ぐため修業を始めている。以下はW氏の環状2号線についてのお話をまとめたものである。

環状2号線が、この新橋地域一帯と汐留、お台場を結ぶようになれば有意義なものにな

ると考えている。真ん中に大きな道路が通ることにより、浜風の流れもよくなり、防災もよくなるだろう。ただ基本的には、外堀通りがあれば十分なように思う。それで足りないのなら、外堀通りを2段階にすることによっても補強することができたのではないだろうか。

また、現在の計画では歩道が5.5メートルとなっているが、このように歩道が狭いと商売にならない。歩道によって人の流れが変わるので、歩道と場合によっては橋をもっと広くしてほしい。理想としては、フランスパリのシャンゼリゼ通りのような感じにしたいと考えている。また新橋は、桜川小学校、桜小学校、桜田小学校などという学校名がつけられているように、桜の町なので、道路に桜を植えたいと考えている。また、歩道にカフェテラスのようなものも作りたい。

環状2号線の計画については、役人が何度か地元の人達に向けての説明会を開いた。そして、何度か説明会を開いたのだからそれで住民は納得したのだとして、無理やり計画を進めていった。しかし、住民側にも、東京都の再開発だからしょうがないという投げやりな姿勢が強く見られる。赤レンガ通り商店街の雰囲気としては、この計画には無頓着で、自分の所はもとある場所に残るのだからいいやという考え方が強い。誰かがやってくれるだろうという人任せの雰囲気がある。現在は新しいよその力が多く入ってきているので、その人たちのせいにしているところがある。

環状2号線ができることのメリットは、家や店が新しくなりきれいになったこと。冷夏のおかげで売り上げもそんなに落ちていない。反対にデメリットとしては、店の場所が少しひっこんだ場所に移動したことが挙げられる。

「汐留」という地名はなく汐留は新橋なので、このことを意識して今後汐留のお菓子を作っていきたくてW氏は考えている。環状2号線と自分の店とを繋げていく工夫をしていきたい。環状2号線が完成すればその周りに商店が出るはずなので、その人達と協力していきたいという。そこに出る商店は新しいテナントであっても古くからある店であってもどちらでもよい。また、新橋は路地文化であるとW氏は考えている。この路地文化が新橋の味であり和みであると思う。だから、環状2号線と路地の融合もしっかりと考えていきたい。今の新橋の町に足りないのは憩いの場である。うるおいが足りない。目的地から目的地へとせかせかと歩く人ばかりなので、環状2号線に時を楽しむ場を作るべきであると考えている(以上、W氏ヒアリング, 2003)。

このようにW氏は、すでに道路設置後の自分の店の展望、新橋の町の展望を考えており、環状2号線に対して積極的な姿勢であることが分かる。また、環状2号線ともとからある町との関係性も重視しており、環状2号線をこの町に活かそうという姿勢がみうけられる。ただやはり、この道路に対して保守的な人がほとんどのようで、そのような町の雰囲気の中、環状2号線を町に活かしていくのはとても難しいことである。W氏がテレビ番組『ガイアの夜明け』に出演したことによって、地元の人々が少しこの道路に関心を持つようになったという。このように地元の開発に積極的に向き合い取り組む人が、新橋のまちづくり

に欠かせないと思う。他の住民にもヒアリング調査を行ったが、消極的・否定的な意見ばかりで、この道路を商売に活かそうという姿勢はみられなかった。

環状2号線と交差する第一京浜の近くに店を構える履物屋のA屋さんも、この道路には迷惑しているという。やはり、環状2号線が出来ることによる町の分断とそれにともなう人の流れの変化を心配しているようであった(A屋ヒアリング, 2003)。行政に不満を持っており、この道路を自分の商売に活かしていこうという積極的な姿勢は見られなかった。

また、同じく環状2号線と交差する第一京浜の近くで製本業を営むM氏も、この道路に関しては「デメリット」という意識が強かった。第一京浜と環状2号線という二つの大きな道路が交差するため、この辺りが渋滞になることを心配していた(M氏ヒアリング, 2003)。

このように、環状2号線に対しては全体的に否定的な見方が多い。新橋の気質である保守性ともあいまって、受け身にこの計画を眺めていることが分かる。そんな中で和菓子屋のW氏のような存在は、新橋の町にとってとても大きいと感じる。W氏はもうすでに汐留客をターゲットとしたお菓子の案を練っており、名前もつけていて、楽しそうにそれを見せて下さった。環状2号線のような大きな道路ができる場合、このような自営業者のやる気が何よりも大切であると感じる。新橋は人任せなまちづくりの傾向が強いと何度か指摘してきたが、それは新橋が都心であるからということが一番の要因ではなく、やはり人々のまちづくりに対する意識が低いからだということに気付いた。人々のまちづくりに対する意識が低いのは、確かにこのような大規模開発が次々と行われてしまうことや定住する人が少ないことと大きく関係しているだろう。しかしそんな中においても、それぞれがこの町をよくしていこうとモチベーションを高く持つことがとても大切であると思う。都心の中でその場所の個性を表現していくためには、住民、特に自営業者のやる気と奇抜なアイデアが鍵になると考える。

5 - 3 大規模開発が新橋にもたらすもの

このように、現在新橋では汐留再開発と環状2号線設置という二つの大規模な計画がほぼ同時進行しており、町が大きく生まれ変わろうとしている。このような大規模開発は都心の町ならではのものである。何度か述べているように、開発は一般的にその町に寄与するものであるが、都心における開発だと今回の場合のように必ずしもその町に寄与するものであるとはいえない。「町」という単位も大切だが、それとともに「都心」という機能を果たすことに重点が置かれる。では一体、このような大規模開発は新橋という町に何をもたらしてくれるのか。このことを新橋の保守性と合わせて考えた場合、このような大規模開発は町を大きく変化させるため、半強制的に新橋住民のまちづくりへの意識を呼び起こすことに繋がるのではないかと考える。新橋の町は放っておいたらあまり進歩しないとい

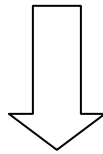
う気質を持っている。よって、周囲で大規模開発が行われることが、住民のやる気呼び起こし、新橋の町全体を新しくしていくことになるのではないだろうか。もちろんその結果、この町を離れていってしまう人も多くいる。しかし基本的に新橋の自営業者は、各々が自分のものさしで働いているのが現状である。また、人の出入りも激しい。よって、地域コミュニティを高めるといよりはむしろ、個々の店のモチベーションをそれぞれが自分の店の生き残りのために高めていくという形態をとることがよいのではないかと考える。芝家具業者たちもそうであったように、人々が自分の仕事に責任と誇りを持ち、組織に重点を置かないで親睦程度関係を維持することが大切である。自分の仕事に対してやる気さえあれば、芝家具業者たちもそうであったように、それが結果的に地域コミュニティの高まりへと発展していくのではないだろうか。

大規模開発によって大きなビルやテナントが立ち並ぶが、これらは必ずしも住民の希望を満たすものではない。昼間人口と夜間人口、両者の希望を実現することができるのは自営業者であると思う。芝家具が客の一人一人に対して一品生産を行っていたように、地元商店街も多様な人々に対する多種多様な商売を行うことが必要だと考える。今後ますますこの場所には色々なタイプの人々が来るだろう。一人暮らしや高齢者が増加するという予想もされている。このような一見係わり合いのなさそうな者同士を結びつける力を持つのも商店街であると考え。大規模開発が行われるからこそ、大規模開発ではまかなえない部分が発生する。そのような点を発見し、それを商売や自分たちの文化に活かしていくことが重要なのではないだろうか。大規模開発には、自営業者が活躍する大きな可能性が秘められていると考える。

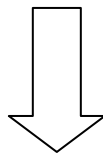
第6章 都心における「場所の個性」とその可能性

6 - 1 論文構成図

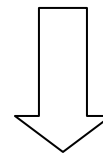
新橋の場所が持つ力(第1章)は、それまでの新橋が刻んできた歴史や人、時代の流れ(第2章)によって創られてきた。



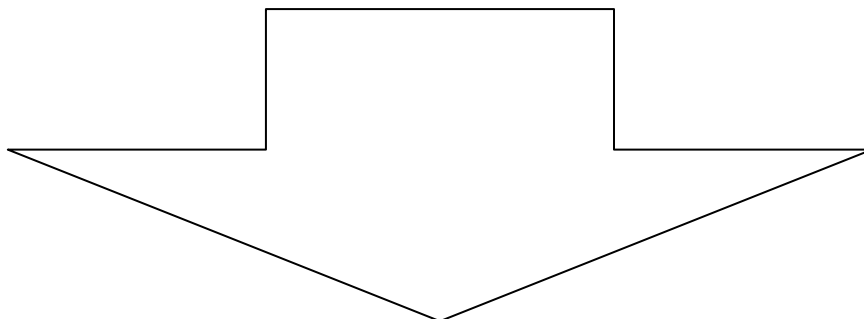
これらの歴史には江戸っ子の気質である保守性が見え隠れする。それとともに排他的でもあったことが新橋の土地の高騰ともあいまって、祭りや町内会の衰退へと繋がり、この場所の地域コミュニティを低下させる要因となった。また、新橋の商業衰退や人口減少にも影響を与えた(第3章)。



このような土地柄や気質が芝家具を新橋の地に発祥させ、発展させた。芝家具業者は高級一品生産にこだわりを持ち、戦時中の統制下以外、常に自分のものさしで動いた。また、都心として時代の流れを確実に受け止めながら進んでいった(第4章)。



新橋に根付く保守性は、この土地が都心として持つ大きな力による大規模開発を受け入れ、町を発展させてきた。またこの大開発による暮らしの変化を、住民は自分のものさしで判断し、町に各人がそれぞれの色を刻んでいる(第5章)。



開放的な風土と排他的な気質という、この相反する両者のバランスをうまくとること、そして自分のものさしを持つことによって、都心においてその「場所の個性」を生み出すことが可能となる(第6章)。

6 - 2 都心における「場所の個性」とその可能性

この論文では、新橋の場所や人の特色を、新橋の位置関係、歴史、住民によって創られてきた新橋、芝家具という商業が形作った新橋、大規模開発によって進展する新橋という多角的な面から分析してきた。ここでは、本章1節の論文構成図を詳しく説明するとともに、都心における「場所の個性」とその可能性について、これらの要素を組み合わせ考察していきたいと思う。

新橋が都心となったのは、その位置関係によるところが大きい。第一に海に近かったことが、海外や他の県との繋がりを持つ最適な条件となった。竹芝棧橋など港の整備が積極的に進められたため、船なども留まることが可能となった。また船とともに他地域との関係を保つ重要な役割を担ったのが鉄道である。新橋に日本初の鉄道が創設されたことは、新橋のまちづくりの様々な方面で多大な影響を与えた。このような他地域との繋がり、新橋の土地に開放的な風土を生み出すことに繋がった。芝家具業においても現在の情報産業においても、様々な人々が集っており、またこれらはボーダレスな産業であることがその証拠である。新橋は時代の動きをいち早く掴み取って、時代とともに動いていく場所である。日本に洋風化の波が押し寄せてきた時には芝家具を地場産業とし、近年は情報の時代であるから情報産業を一番の強みとしている。このような流れを見ると、新橋という地域は昔から都心としての役割を果たしていた地域であることが分かる。

また、海に近いという位置関係は、この地に大使館や外資系企業を多くもたらすことにもなった。新橋に武家屋敷が多く、それが明治時代に荒廃して空き地になったこととあいまって、このような状況が生まれた。そしてこれによって外国人が多くこの場所にやってきたことが、芝家具を新橋の地に発祥させた一つの要因となった。位置関係において芝家具の発祥に影響を与えたものとして他に、銀座や丸ノ内のビジネス街が挙げられる。時代の最先端、芝家具時代であれば洋風化の最先端に行く町が近隣にあったことで、洋家具の需要は爆発的なものとなった。

歴史を見ると新橋の町の特徴として、「次々と変化していく」ということがいえる。多くの火災、震災、空襲で何度も新橋の町は崩壊し、その度に再建してきた。しかし前述したような土地柄であったため、再建も速く、常に時代をリードする存在であった。太平洋戦争後も新橋駅周辺に人が集ってきたことがその証拠であろう。徳川家康による上下水道の整備、大火による防火対策などの都市改造、関東大震災による道路拡張などの首都再建、東京オリンピックによる更なるインフラ整備。このように新橋は、町が崩壊する度に町が進歩する地域である。しかしここで気がつくのは、これらの開発は全て国や行政が中心となっていて行われているものであるということである。新橋を都心に押し上げたこれらの開発は、新橋の住民の力というよりは、新橋の土地が持つ力と行政の力であったということができるのではないだろうか。

では、新橋の住民はこの町にどのような影響を与えてきたのか。新橋の住民の中で最も

強くこの土地に影響を与えたのは、江戸っ子であると考え。なぜならこの江戸っ子の気質が現在もなお色濃く受け継がれているからである。鼻っばしが強くさっぱりしているとともに、排他的で保守的な面が江戸っ子にはある。これらの気質が新しくこの土地に入ってきた人を「よそ者」扱いすることとなり、住民によるまちづくりの停滞に繋がった。引っ張ってくれるリーダーがいなければ町が盛り上がらない状態となってしまう、それによって現在は祭りも鎮静化、町内会も衰退している。もちろんこれらの現象は、住民の気質だけでなく、時代の流れとこの土地との関係にもその要因が含まれている。土地の高騰による住みにくさの発生や時代がビル化の流れになったことでこの場所は一番にそれを受け入れ、マンションばかりが建つようになった。これらによって地域コミュニティが希薄になっていった。

江戸っ子の気質とも関係するだろうが、昔も今もこの土地には、個性的で自分のものさしを持っている人が多い。それを最もよく表しているのが新橋の地場産業にのし上がった芝家具業なのではないだろうか。芝家具業者たちが戦争時以外は親睦的な組織しか作らなかったこと、芝家具自体が芸術的な面を持っていること、高級一品生産にこだわったことなどは、新橋の地に個性的で自分のものさしを持つ人が多かったことを表していると考え。このことから、新橋という場所は集団意識の低い場所なのではないかと推測する。必要があれば協力するが、それ以外は自分の好きなようにやるという傾向が強いと感じる。それは冷たさではなく、自分に自信と誇りを持った生き方なのではないだろうか。現在都心は「周囲の人のわずらわしい干渉が無く住める場所」と思われている一面がある。確かにそれもあるかもしれないがそれは一面であって、新橋という場所がこのように人々に映るのは、実はその根底に独り立ちした強さを新橋の人々が持っているからだと考え。芝家具業が現在その姿形がないのも、家族の一人一人が自分の生き方をじっくりと考えているからだとは考えられないだろうか。時代が量産・画一化の時代に向かっても、高級一品生産の誇りを捨てない。そんな熱い思いが、ドライに芝家具を衰退させていったのではないかと考える。芝家具業者のお金の使い方を見ても、自分のものさしで判断するという傾向が強い。時代の波に乗るとともに常に自分らしい誇りを持つことが、都心においてその場所の個性を表現する重要な手段であると考え。

反対に、高級一品生産をいつまでも守っていたことや店を自分の息子に継がせる傾向が強いことなどからは、新橋の性質が保守的であるという解釈ももちろん可能である。事実、現在行われている大規模開発についてヒアリング調査を行った際も、受身的な意見が多かった。しかも現在再開発が行われている汐留地区は、人間の住んでいる匂いのしない町であり、住民の手の届かないところで大きな力が働き、それが町を造っていると感じることもある。この状況は事実であると思うが、しかし新橋の住民は必ずしも受身になっているのではなく、これらの開発を自分のものさしで判断した上で静かに受け入れているのではないだろうか。自分の役割はきちんと果たす、反対に任せるところは任せる、この両者のバランスをうまくとることによって、大規模開発においても一人一人の考えのもとでこの

まちづくりが行われているのではないかと考える。この論文を書き始める前までは、都心の役割を果たすための大規模開発はその土地の住民の意志とは関係のないところで進められているのだと考えていた。しかしそうではなく、大規模開発進行もこの場所の個性の重要な一部であるということに気付いた。大規模開発と地元のローカルな個性は、相反するものではなく、お互いがお互いを尊重しあえる関係なのではないかと考える。新橋の味である路地文化を残していくために新橋に隣接した場所でビルを建てる必要があるように、江戸っ子の気質や場所の力を表現するためには、地元になんか新しく入ってくる力（大規模開発）が必要である。どんなに時代が移り変わっても決してビル一色の町にならないのは、大規模開発と地元の個性との間にこのような刺激や可能性を与え合う作用が働いているからではないだろうか。そして両者をまとめて、この土地の場所の個性であるということもできる。

祭りや町内会の状況、住宅形態の現状をみると、確かに新橋の地域コミュニティは希薄である。しかし速いスピードで変化する新橋のまちづくりにおいて大切なのは地域コミュニティではなく、一人一人が前述したような熱くドライな考えを持つことなのではないだろうか。和菓子屋「新正堂」のご主人である W 氏が、周囲の人が汐留再開発にあまり興味を持たない中でも汐留のお菓子作りに夢中になって取り組んでいるように、一人一人が自分のものさしで動くことがこの場所の個性になるのではないかと考える。そしてまたこのような形態が、人々の多様化するニーズを背負うこれからの時代の新しい地域コミュニティの形にもなり得るのではないかと推測する。新橋が持つ「場所の力」は、都心の町だけでなく様々な町に、町の可能性を提示することが可能であると考え。なぜなら、新橋という場所は、常に時代や人々の先端を行くまちづくりに直面しなければならない状況におかれているからである。新橋の場所の個性はその時代を表すものでもあるので、その点においてどんなタイプの町にとってもその町の視野を広げるきっかけとして作用するのではないかと考える。

新橋における開放的な風土と排他的な気質、両者は一見対立しているように見えるが、この両者のバランスを自分のものさしによって計っていくことで、都心において都心にそびえたつ大きなビルにも負けないような「場所の個性」を生み出すことができるのだと考える。そしてその場所の個性が、その場所の歴史を刻む力として作用し、都心においてもなお、その場所を人々が自分のものとして認識することが可能となり、都心を人によって創られる人間味のある町にすることが可能となるのではないかと考える。

参考文献

- ・ チッタ・イタリア街づくり推進会議『Citta Italia 総合マネジメント計画』, 2002年
- ・ チッタ・イタリア街づくり推進会議『Citta Italia テナント導入管理計画』, 2002年
- ・ チッタ・イタリア街づくり推進会議『Citta Italia 街づくり基本計画』, 2002年
- ・ チッタ・イタリア街づくり推進会議『Citta Italia 施設デザイン計画』, 2002年
- ・ 東京都港区教育委員会『新橋・愛宕山付近 港区の文化財・第8集』港区役所, 1972年
- ・ 東京都港区教育委員会『増上寺とその周辺 港区の文化財・第3集』港区役所, 1967年
- ・ 東京都港区教育委員会編『わたしたちの郷土港区』港区教育委員会, 2003年
- ・ 東京都港区立みなと図書館『写された港区 一』, 1981年
- ・ 東京都港区立みなと図書館『写された港区抄』, 1993年
- ・ ドロレス・ハイデン『場所の力~パブリック・ヒストリーとしての都市景観』学芸出版社, 2002年
- ・ 港区『暮らしのガイド』廣済堂, 2002年
- ・ 港区『統計情報 国勢調査編 2003』, 2000年
- ・ 港区『港区基本計画(平成15年度~平成20年度)港区実施計画(平成15年度~平成17年度)』, 2002年
- ・ 港区『みなと区政要覧』, 平成15~16年度版
- ・ 港区『Minato City in a Minute』, 2001年
- ・ 港区街づくり推進部『港区の街づくり 平成14年度 事業概要』, 2002年
- ・ 港区役所『港区史 上巻』港区役所, 1960年
- ・ 港区役所『港区史 下巻』港区役所, 1960年
- ・ 森記念財団『都心に住む子供たち 港区の環境カルテ その9』森記念財団, 1999年

ヒアリング対象者

新橋6丁目東町会元町会長 TK氏(家具屋「K商店」) 2003年9月26日

YH氏(家具屋) 2003年10月8日

A屋さん(履物屋) 2003年10月6日

M氏(製本屋「M製本」) 2003年10月6日

環状2号線新橋街区副部長・新橋赤レンガ通り発展会副会長 W氏(和菓子屋「S堂」)
2003年9月26日

東京都建設局再開発事務所環二地区長 M氏 2003年10月9日

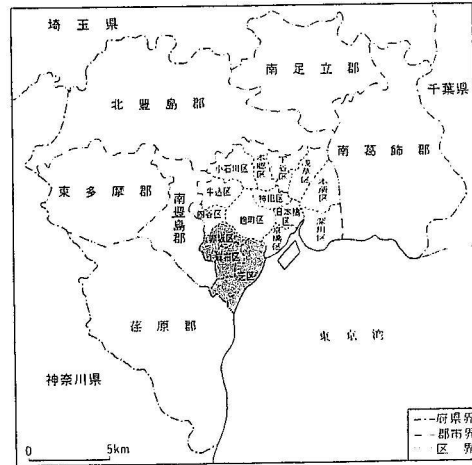
図表 1-1 港区の位置

(『みなと区政要覧』平成 15~16 年度版より)

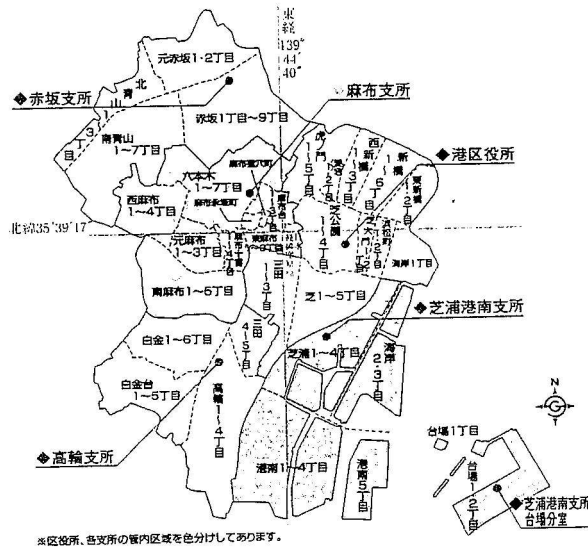


図表 1-2 芝区・麻布区・赤坂区の位置

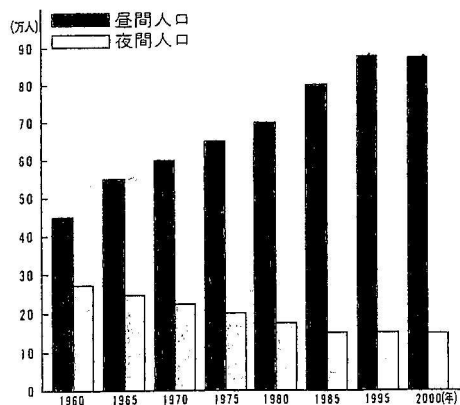
(『わたしたちの郷土港区』より)



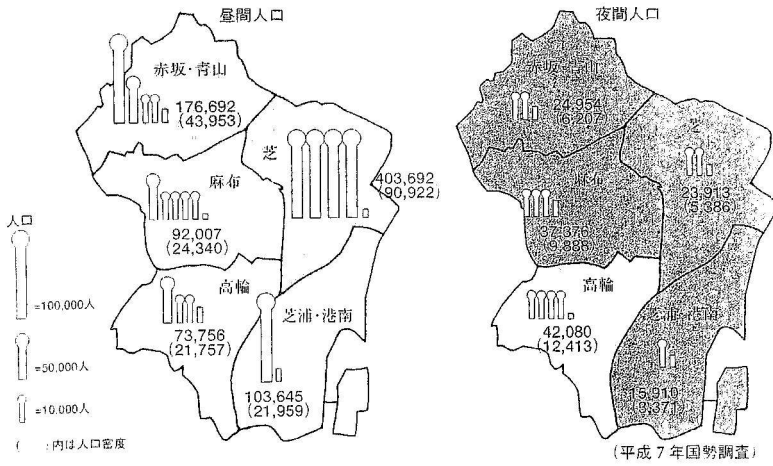
図表 1-3 海と中央区に隣接する新橋 (『わたしたちの郷土港区』より)



図表 1-4 港区の昼夜間別人口の推移 (『わたしたちの郷土港区』より)



図表 1-5 地区別に見た昼夜間人口
 (『わたしたちの郷土港区』より)



図表 1-6 港区の人口の推移
 (『みなと区政要覧』平成15~16年度版より)

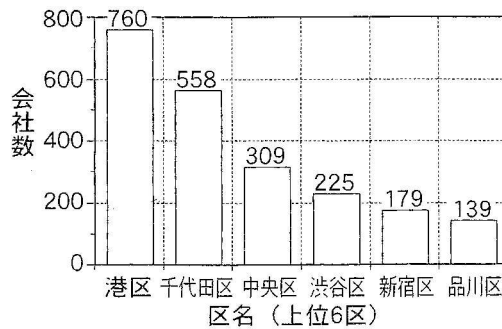
年	総数	男	女	世帯
昭和55年	200,282人	95,953人	104,329人	86,758
56	200,727	95,810	104,917	89,954
57	200,688	95,649	105,039	90,692
58	201,101	95,815	105,286	91,840
59	199,999	94,603	104,196	91,836
60	197,165	93,900	103,265	91,978
61	193,536	92,185	101,351	90,835
62	188,683	89,945	98,738	89,364
63	190,958	86,282	94,576	85,933
64	172,181	82,515	90,646	82,774
平成2年	166,846	79,307	87,539	79,987
3	161,082	76,439	84,643	77,544
4	156,522	74,000	82,432	75,821
5	152,794	72,065	80,710	74,689
6	150,751	71,670	79,071	74,106
7	149,341	70,867	78,454	74,623
8	149,716	70,490	79,218	75,166
9	152,320	71,459	80,861	77,294
10	152,630	71,490	81,131	78,448
11	154,370	72,154	82,216	80,199
12	155,394	72,575	82,819	81,578
13	159,746	74,261	84,985	84,419
14	162,691	75,801	86,800	87,307
15	164,471	76,550	87,921	89,200

図表 1-7 平成13年度民有宅地の用途別内訳
 (『港区の街づくり—平成14年度 事業概要—』より)

	港 区		23 区	
	面積	構成比	面積	構成比
住宅地区	6,235 千㎡	68.5%	271,331 千㎡	86.7%
商業地区	2,505	27.5	20,235	6.5
工業地区	362	4.0	21,478	6.9
その他	0	0	0	0
計	9,102	100.0	313,044	100.0

(注) 1 課税資料によるものです。(平成13年1月1日現在)
 2 構成比は四捨五入の関係で内訳合計が一致しない場合があります。

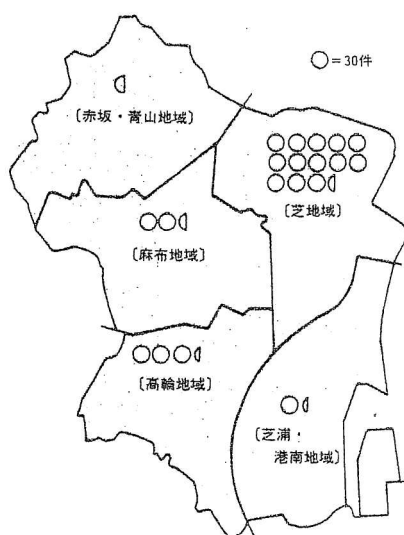
図表 1-8 23区内の外資系企業数 (『わたしたちの郷土港区』より)



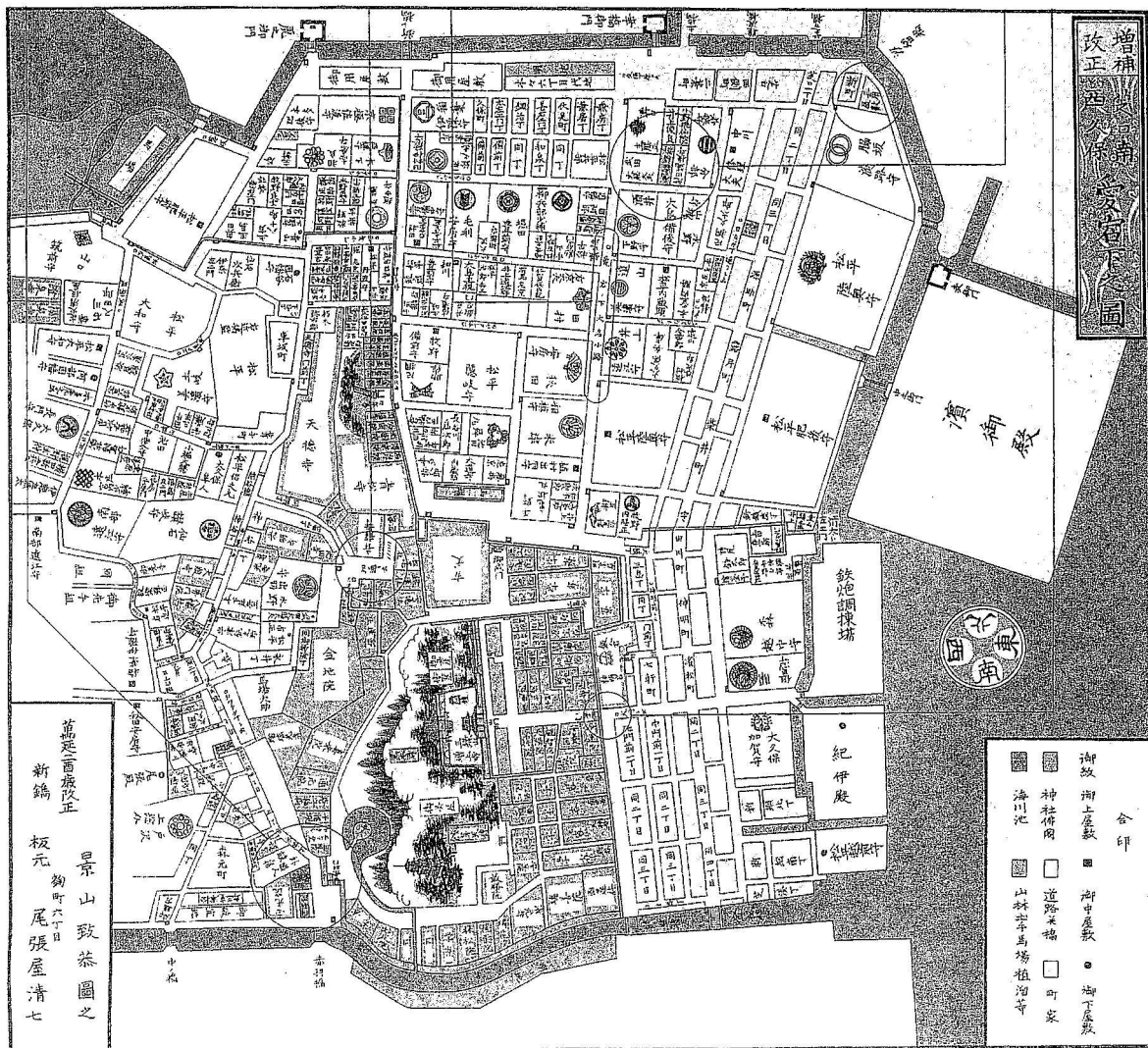
図表 1-9 港区内にある新聞社の地区別数 (『わたしたちの郷土港区』より)

地 区	一般	業界	合計
芝	19	65	84
芝浦・港南	9	8	17
高輪	2	2	4
麻布	7	3	10
赤坂・青山	10	4	14

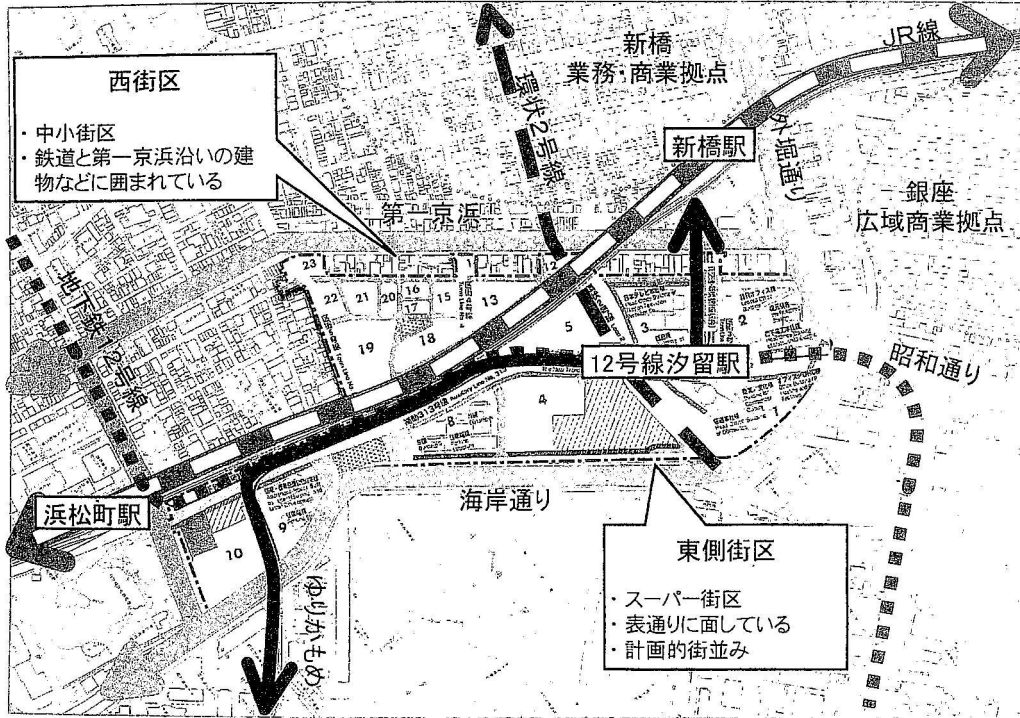
図表 1-10 地区別にみた出版・印刷工場数 (『わたしたちの郷土港区』より)



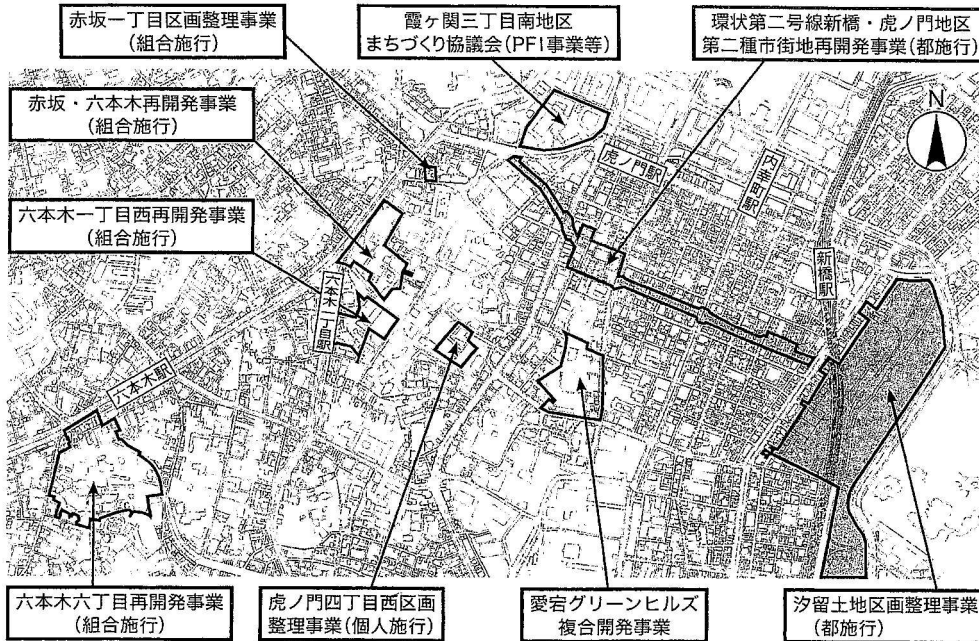
図表 2-1 江戸時代の新橋周辺地域 (読売新聞, 1991年9月1日より)



図表 5-1 汐留再開発の位置 (『Citta Italia 街づくり基本計画』より)



図表 5-2 環状2号線と汐留地区の位置関係 (『環状第二号線新橋・虎ノ門地区』パンフレットより)



図表 5-3 環状2号線（『環状第二号線新橋・虎ノ門地区』パンフレットより）

